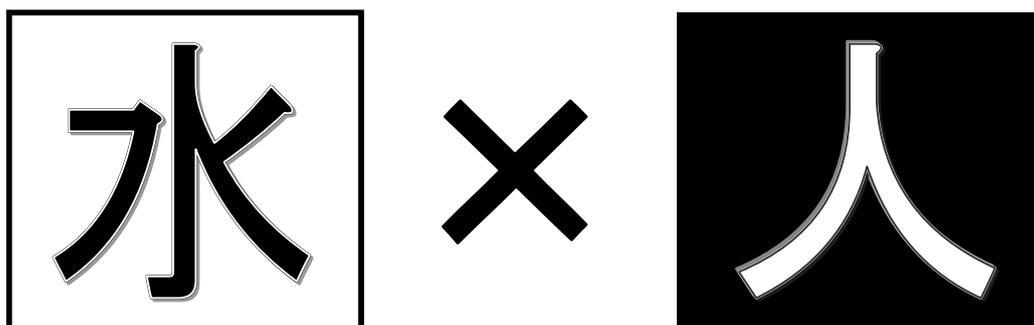


第15回全国水の郷サミット



まちは、水ともっと仲良くなれる。

【開催報告書】

平成21年10月15日(木) 13:00～17:00

パークウエストン 1階 ボールルーム

主催：徳島市

後援：国土交通省、徳島県、徳島県市長会、徳島県町村会、徳島商工会議所、(社)徳島青年会議所、(社)徳島県建築士会、(財)日本グラウンドワーク協会、(財)ダム水源地球環境整備センター、(株)自治日報社、全国水源地域対策基金協議会

目 次

1	主催者挨拶	
	徳島市長 原 秀樹	1
2	来賓挨拶	
	国土交通省土地・水資源局水資源部長 谷本 光司 氏	3
3	基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」	
	法政大学デザイン工学部建築学科 教授 陣内 秀信 氏	5
4	実践事例報告	
	事例報告1 「人と人、街とまちを結ぶ雁木タクシー」	
	NPO法人雁木（がんぎ）組 理事長 氏原 睦子 氏	27
	事例報告2 「水都大阪・水辺の賑わいづくり」	
	伴ピーアール株式会社 代表取締役 伴 一郎 氏	37
	事例報告3 「いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。」	
	柳川市総務部企画課 係長 山田 秀太 氏	47
	事例報告4 「川を生かしたまちづくり」	
	NPO法人新町川を守る会 理事長 中村 英雄 氏	57
5	パネルディスカッション「水×人ーまちは、水ともっと仲良くなれる。ー」	67

主 催 者 挨 拶

失礼いたします。ご紹介賜りました、市長の原でございます。主催者を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は大変お忙しい中、第15回目を迎えました全国水の郷サミットに、大勢の関係者の皆さま、そしてまた、全国各地からたくさんの方にお越しいただきまして開催できますこと、本当に心からお礼申し上げますとともに、各地からお越しの皆さま、心から歓迎を申し上げたいと思います。

徳島市は大河・吉野川をはじめまして、大小138の河川が網の目に巡っているまちでございます。水辺環境の親水事業や市民の水環境保全に対する活動などが評価され、平成7年度に国から「水の郷」の認定を受けております。その後も、川を生かしたまちづくりに全力で取り組んでいるところでございます。

本市の中心部である内町地区は、ちょうどこの会場前を流れる助任川と、それに隣り合う新町川に囲まれた地区で、その地形が、上空から見るとひょうたんの形に見えること、また、かつてこの地区に「瓢箪島」と呼ばれる地名が存在していたことから、「ひょうたん島」の愛称で親しまれております。

本市では、この「ひょうたん島」を重点整備地域とする「ひょうたん島水と緑のネットワーク構想」を策定し、県と共同で、これまで親水公園や遊歩道、護岸修景等の整備を行ってまいりました。

また、本日ご出演いただいております、NPO法人・新町川を守る会の中村理事長をはじめ、多くの市民の皆さまの協力によりまして、清掃や周遊船の運航が行われるなど、行政と市民が一体となって数々の水辺の魅力づくりに取り組んでまいりました。

現在、本市では、徳島が世界的なLEDの先進地であることから、これまで整備してきた水辺をLEDの「光」で彩る、新たな魅力づくりに取り組んでおります。

平成19年度からは、ひょうたん島周辺の公園や橋の景観整備に取り組んでいるほか、来年4月には、LEDアート作品で街を彩る「LEDアートフェスティバル」の開催を予定しております。今後、公共工事にもLEDを取り入れて、光が水に映えるまちづくりを行っていきたいと思っております。

今回のサミットでは、「水×人ーまちは、水ともっと仲良くなれる。」をテーマに、法政大学の陣内教授から、水を生かしたまちづくりの世界的な成功例などに関する基調講演をいただくほか、全国各地の水辺でご活躍されている方々から、日頃の活動事例やご苦労された点、その改善策などを紹介していただきます。

まちと水をもっと仲良くしていくために、私たちは水とどのように関わっていけばいいのか、どのように水を生かしたまちづくりを進めていけばいいのかといったことにつきまして、ご参加の皆さまとともに、一緒になって考えてまいりたいと思います。

最後になりましたが、ご出演をいただきます皆さま、また、本日お招きしております谷本部長さんをはじめ、サミットの開催に当たりまして多大なご尽力をいただきました、国土交通省や関係者の皆さまに感謝申し上げますとともに、本サミットが実り多きものとなりますことを心から祈念いたしまして、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

来 賓 挨 拶

国土交通省水資源部長の谷本でございます。本日は、この第15回全国水の郷サミットにたくさんの方がお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

はじめに、水資源部という聞きなれない名前でございますので、どういう仕事をしているのかといったことにつきまして、簡単にご紹介させていただきます。

名前のとおり、わが国の水の供給と消費のバランスをどうしていくのかという政策を受け持っている、堅苦しく言うとそういうことでございます。四国にも早明浦ダムという大きな水がめがございますけれども、この一つの水がめに4つの県が依存して暮らしております。ですから、この早明浦ダムの水が減ると、四国全体が厳しい状態になるということでございます。あまりニュースでは報道されておきませんが、現在でも沖縄の一部では、一日おきにしか水が出ない隔日断水という渇水が続いております。

振り返りますと、我々が子どもの頃はまだ、沢水を飲んで、手押しのポンプで水を汲むという生活が当たり前でございました。現在は、水道設備等が充実しまして、蛇口をひねれば水が出るという生活に慣れております。今のお子さんたちは、そういう生活しかしたことがありません。

これが仮に、ひどい日照りが来て、水が出なくなったときにどういうことが起こるのか、また、そうならないためにどうすれば良いのかといったことを政策的に勉強していく、また、実際に水道あるいは農業用水を確保する事業をしている人たちと連携して推進していく、そういった仕事をしております。

その関連で、水を開発するといいますか、放っておけば海に流れてしまう水を一旦貯めて、飲み水や農業用水に使う装置としてダムというものがある訳でございますが、ダムが造られる郷というのは土地を提供して、大きな湖になります。それによって、下流のまちが洪水から守られたり、あるいは安心して水が飲めたりする訳でございますけれども、その土地を提供して水源になった村々は過疎化や少子高齢化といった波の中で、まちづくり、まちの経営が非常に厳しいというのが現実でございます。

こういった水源地域のまちの活性化も、我々の仕事の一つでございまして、そういうことからこの水の郷サミットもお手伝いをさせていただいている訳でございます。

昔は各地の持ち回りで開催されておりましたが、ここしばらくは東京で開催しておりました。先ほど市長さんからのお話もございましたように、徳島市が水の郷の認定を受けておられること、また、市制 120 周年ということもありまして、徳島市がうちのまちで開いてやろうということで手を挙げていただきまして、久しぶりにこうして現地で開催することができました。

ご尽力いただきました市長さんをはじめ、皆さま方に感謝を申しあげたいと思います。

また、今、申しあげました経緯と、今日お話いただく内容は、少しトーンが違うのかもしれない。

水に関わるということでは大きく括られていますけれども、どちらかというともちの中の水、まちの近くの水、あるいは手に触れられる水、そういった事例紹介の中から、水と我々の暮らしの関わりについての事例報告やご議論がされると伺っております。

いずれにしろ、水というのは我々の生活に欠かせないものです。どうせなら楽しく付き合っ、仲良くしていける方が良いに決まっておりますので、そういった知恵を一つでも、二つでも新しく身に付けて皆さん帰っていただければ、今日、このサミットを開いた成果が十分あったのではないかと思います。

私も個人的に、大いに期待しております。本日のこの会議が、無事、成功裏に終わることを心から祈念申しあげまして、私からのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

基調講演

川を活かし、水に親しむまちづくり

法政大学デザイン工学部建築学科 教授 陣内 秀信 氏

東京大学大学院工学系研究科修了、工学博士。専門はイタリア建築史・都市史。イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学に留学、ユネスコのローマセンターで研修後、東京大学助手を経て現職。86年パレルモ大学契約教授、95年トレント大学契約教授。2005年ローマ大学契約教授。サントリー学芸賞、建築史学会賞、地中海学会賞、イタリア共和国功労勲章などを受賞。主な著書に「水の東京」（編著）「ヴェネツィア水上の迷宮都市」など多数。

どうもこんにちは。この度は、水の郷サミットにお招きいただき、本当にありがとうございます。

お伺いしたところ、ここ3年間は東京で開催されていたものが、再び水の郷の問題に実際に取り組んでおられる現地に集まって議論しようという、非常に価値ある会だということです。

とりわけ今回、後からご報告される皆さん方は、日本の中でももっとも先進的な、まさにこの領域で華やかに活動されている方々で、そういう知恵と経験をもった皆さんとの話し合いに私も加えさせていただけること、大変嬉しく思っております。

そもそも、私自身が学生のころ、ヴェネツィアに留学しまして、その時、本当に水の都市というのは良いなと、つくづく体で感じました。1976年の秋に日本に戻ってきまして、今は法政大学で教壇に立っております。

東京の都市を歴史的、文化的な視点から捉え直すという活動をしている中で、実は東京も、大阪と並んで水の都市だったということに気が付いて以来、俄然おもしろくなりまして、その頃から船で学生たちと街を周るということをやってきました。

今回のご当地、徳島は、以前から水の復権と

しようという活動が盛んな地域で、船を走らせるなど非常に遊び心のある、日本のまちが、水と仲良くしながら魅力的になっていくお手本を示してくださっているということを知っています。以前お訪ねしたとき、何人かの仲間と中村英雄さんの船に乗せていただき、ご案内していただきまして、本当に感銘を受けました。

そういう全国のトップで活躍されている方々のお話を伺える訳ですけれども、その前に、少し自分の海外での経験、そして東京での取組をご紹介します。



ご覧いただいている水辺の絵ですが、去年、学生たちが設計演習で取り組んだワークショップのものです。イタリアの建築学部の人たちと、日本の3大学の建築学科が組んで、風景の再生に取り組みましたが、私たち法政大学は、品川・

芝浦の水辺を対象としました。

その時に学生が描いた、大変楽しい絵なので、今日の「川を活かし、水に親しむまちづくり」にピッタリかなと思ってきました。

現実はこちらではなく、高層ビルが並んでいて、さびしくて、水の上には船がいません。それでは困ると。もっとこういう風に変えていきたいという若者の夢を託した、そういう絵です。

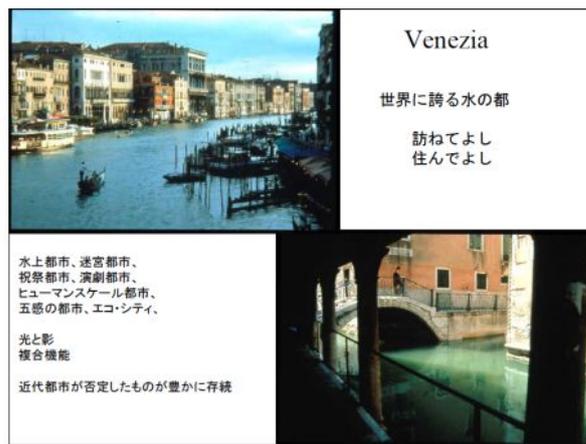


今日はこの後、4つの事例報告がありまして、みんな船を活用しているおもしろい例ばかりですが、世界を見ていくと、今でも船に頼っているというか、上手に活用して、生き生きと暮らしているまちがたくさんあります。

そのまちに行くと、船に乗って水の側から都市を見ます。我々は、ずっとそのスピリットを忘れていました。みんな陸の側からの発想になってしまいましたが、本当は、まちへのアプローチも、川や海の側から行くものでした。

そしてまちに入ると、ビジネスから遊びから宗教まで、舟運が色々な役割を果たしていました。

左上がアムステルダム、左下がヴェネツィア、真ん中が蘇州、右下はバンコク、右上が日本橋です。



ヴェネツィアが水の都というのは当たり前のことですが、ヴェネツィアに学生時代行ってみて暮らしていると、水の良さ、水の都市の良さというものが分かってきます。

色々な観点から、水の都市の価値というものはあると思いますが、左に書いてある言葉が、日本も豊かになって、もっと魅力的なまちをつかっていきたいというときに出てきたキーワードだと思います。

ヒューマンスケールの都市とか五感の都市、祝祭都市、エコシティ。こういうものをヴェネツィアはずっとキープしてきて、結果的には近代都市が失ってしまった良い物をみんな持っています。それが世界の人々を魅了し、みんながここを訪ねて水の都市を体感するということにつながっていると思います。



まず、今日も大きなテーマになると思います。舟運です。

ヴェネツィアでは、本当に多彩な船が活躍し

基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」

ています。伝統的にゴンドラとか手漕ぎの船が多かった訳ですが、今もたくさんあります。エンジンが付いて、近代には舟運がもっと活発になり、人間の行動範囲が広がります。

左上は水上バスです。水上バスは、定期便がくまなく巡っています。左下は水上タクシーです。

今日は、広島雁木タクシーの例をご紹介いただけますが、大阪でも水上タクシーは運航されており、横浜でも去年、実験的に運行が行われました。東京は残念ながら、少し出遅れていますけれども、やれば絶対に成功するのではないかと思います。

ヴェネツィアの場合はタクシーが本当に便利で、飛行場からヴェネツィアのまちにボートで入って、ホテルまで水上タクシーで着いてしまいます。このタクシーの乗り場があちこちにあります。もちろん、マーケットに物資を搬入するのに船が使われます。



これが水上バスの運行図です。急行から鈍行まで色々なルートがあって、周辺の島にも行きます。

イタリアの鉄道は時間が不正確で困ってしまうという話をよく聞きますが、ヴェネツィアの水バスは非常に正確です。本数は少なくなりますが、24時間運航していますので、非常に便利でどこへでも船で行くことができます。

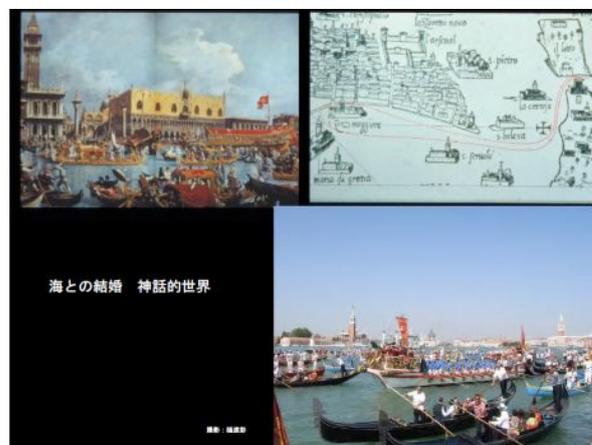
実はヴェネツィアには、左上の方に鉄道が入ってくる駅と、バスが入ってくるターミナルが

ありますが、あとは歩くか船しかありません。歴史的にも馬の通行を禁止したほどです。

もちろん、近代には不便だとか時代遅れだとか見られたこともあったかもしれませんが、本当に水と上手く付き合ってきました。

かつては、一部の運河を埋めたこともありましたが、その失敗に気がついて、今では水を大切にし、水の循環を大切にしています。

水循環は、今、日本でも非常に大きなテーマとなっています。水質をキープし、そして活用するという事です。もちろん、水害からどう守るかという大きな課題もあります。



それから、日本も信仰とつながっているという点で同じですが、ヴェネツィアには歴史的に培ってきた水との深いつながりがあります。

ヴェネツィアの場合は、海との結婚ということで、神話的世界で中世から現在までずっとつながっていて、今も右下のように5月にパレードが行われています。



水際の空間の利用の仕方というのは、時代によって当然変わります。

ヴェネツィアもかつては、東方貿易の船がどんどん入ってきて物資を荷揚げしていましたが、こういう大運河沿いの館は、みんな荷揚げをする倉庫、そして取引をする交易センターでした。

ですが、段々その役割はなくなって、むしろ文化を発信する、人を招いて楽しむということが中心になってきます。このカナルグランデも、水上の劇場のようになっていきます。

そして、建築も橋もデザインが変わり、最近では、水辺に色々なカフェテラスが出ています。

このように時代に合わせてみんなが使いこなし、大切にしてきました。



せっかく川があり、運河がある訳ですから、水面が色々なことで頻繁に使われていなければなりません。

ヴェネツィアの水面を1年通して観察していると、本当に色々な使い方がされています。

これは9月の第一日曜日に行われるレガッタの大会で、まちをあげて盛り上がります。全国ネットでテレビ中継もされます。色々な出し物があり、歴史的なパレードも行われるということで、市民がみんな熱狂します。もちろん観光客もたくさんいます。これが秋の訪れ、夏の終わりを告げる歳時記になっています。

このイベントで重要なのは、周りの建物のバルコニーにみんなが鈴なりに集まって、まち全

部が劇場のようになることです。

一般のお客さんは、水際に仮設の観客席が出来ますので、チケットを買って見る、あるいはあちこちにただで見るができる隙間のような場所があるので、そこにみんな集まります。

かつては、ここから東方の物資がどんどん荷揚げされていきましたので、とてもこんなことはできませんでした。

こういうことは、むしろ1930年ごろからできるようになりました。ホテルの前にテラスを出して朝食を優雅に水辺で楽しむ、これはむしろ近代がやり始めたことです。



こういう水上のカフェテラスで、大学生も授業をエスケープしてここでのんびりとくつろいでいます。市民は、こういう何でもない手漕ぎのボートを楽しんでいます。

背後にある上の建物は、パラディオという世界でも最も有名なルネサンスの建築家がつくった教会です。こういう文化財が、さりげない風景の中で日常の舞台をつくっています。

そして何よりも、みんなが水辺をエンジョイするという事です。

これは一朝一夕にはできませんが、日本にはその伝統がありました。大阪の天神祭も後で紹介しますが、千年も続いているお祭りだそうです。ヴェネツィアにも、実はそのぐらい続いている水上のお祭りがたくさんあります。

基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」

う風に最近の集合住宅でも船が下に入れるものさえ造ってしまっています。



これもパラディオが設計した16世紀の教会ですが、お祭りのときにはこういう仮設の参道を架けます。あつという間に組み立てて、お祭りが終わるとまた2日後には撤去します。

渡り初めがあって、前夜祭ではみんなが夕暮れ時から船を仕立てて集まって、花火を打ち上げます。深夜11時ぐらいに花火が打ちあがりませんが、それまではみんな、お酒や食べ物を自分たちが仕立てた船で楽しめます。

我々のグループは、夜の闇の中で目立つようにということで、全員白づくめの衣装で行きました。真っ暗になってサーチライトが照らされると、我々のグループは真っ白に浮かび上がって、非常に幻想的でした。効果満点でした。



そして、暮らしの中にも水が繋がって欲しい訳です。元々、水辺に住むということがヴェネツィアでは当たり前でした。

もちろん水害から守るということは考えなければいけません、ヴェネツィアでは、こうい



ちょっと視点を変えて、今度はむしろ日本に近い例として、ミラノをご紹介します。

ミラノと言えば、ファッション、デザインのメッカとして80年代以降、日本でも大変人気になりました。女性誌もしょっちゅう特集されています。

でも、実はミラノで一番の人気スポットは、このナヴィリオという運河です。20年以上も前から人気のスポットですが、今でも人気は衰えません。

レオナルド・ダ・ヴィンチが右下のように、ルネサンスのころミラノを水の理想都市として構想し、そのスケッチを残しています。

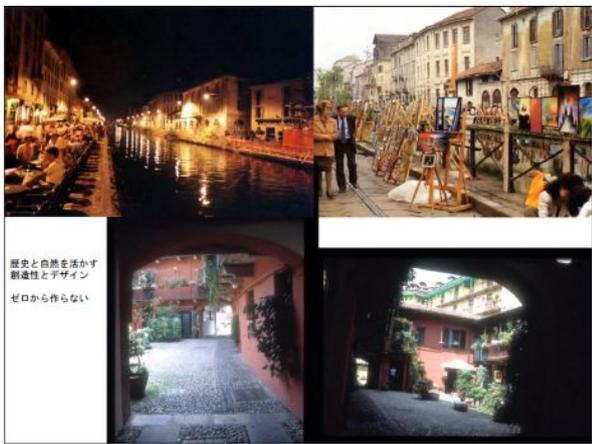
運河が巡り、ロックゲート、このこももん閘門で水位の差を利用しながら、ぐるぐる回っていくという都市をレオナルド・ダ・ヴィンチが提案しています。



この構想に基づいて、ミラノは水の都市をつくってきましたが、東京や大阪と同じように、かなりの運河を埋めてしまいました。

しかし、3系統ぐらい残っていただけだったので、それを20年、30年かけて、行政、市民、専門家が一体となり、持続的に努力して、これを再生しました。

今日、お話のある柳川やご当地の徳島は、市民の方々の大変な努力でドブさらいからおやりになったということで、ある意味でミラノが30年かけて積み上げてきた、川を利用する、運河を利用するという動きと非常に似ているのではないかと思います。



夜は開放的な屋外のレストランがずらっと並んで、労働者が住んでいた住まいが、ちょうど今のアトリエやギャラリー、洒落たアパートなどにピッタリということで、非常に人気のスポットになっています。

こういう川からはじまって、周りの住空間、景観、そして商業施設、すべてのまちづくりにつながってこそ、人々が集まってくる人気スポットになります。それがまちの経済の活性化やイメージアップにつながる。

そういう意味では、このミラノのナヴィリオの成功というのは、非常に示唆的ではないかと思えます。



そういう動きは、今、イタリアでは南のほうに下りていっています。

イタリアは長靴のような形をしていますけれども、南の方では、海を利用しながら非常に良いまちが戻ってきています。

これはトラニーというまちの海沿いで、元々は交易の港でした。

日本でも鞆の浦とか瀬戸内海の港はみんな漁港になってしまいましたけれど、ここも同じです。だけどプレジャーボートがあり、この辺が蘇ってきました。



夜、こんな風に水辺を歩く楽しみを求めて、みんなが集まってきます。

どうして水辺に価値があるのか、どうして水辺が良いのか、どうして人を引き付ける魅力があるのかということ、本当に考えさせてくれます。

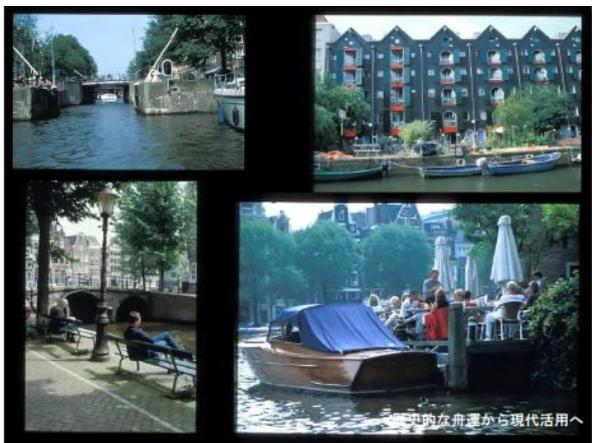
基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」



続いてはアムステルダムです。

ヴェネツィアの時代は中世から16世紀までで、世界都市という観点から言いますと、ブリュージュからアムステルダムに比重が移ります。その次はロンドンで、17世紀から18世紀まではアムステルダムの時代です。

アムステルダムは、ヴェネツィアのようにイレギュラーな迷宮ではなく、運河を本当に計画的に造った、まさに水の理想都市です。



船がたくさん来て、東インド会社の交易で栄えました。運河の中に立派な倉庫がたくさんあります。右上が東インド会社の交易に活躍した倉庫です。

この倉庫は、建築の造り方からすると格好良い訳です。アトリエとか、ギャラリーとか、レストランとか、ちょっと気取った住宅にするのに格好の建築物です。

70年代に、こうした倉庫を壊してしまおうという議論もありましたが、頑張ってキープして、

今や大変な人気となっています。

やはりアムステルダムも、港の機能は外に出ましたので、船が入ってきて荷揚げする場所は必要なくなりました。

その代わりに、この水辺を豊かに利用することができるようになりました。



驚くのはボートハウスです。

ボートハウスというのはパリにもありますが、アムステルダムの場合は、岸辺に荷揚げをする必要が無くなったので、こうしてボートを浮かべて、船の上で優雅に暮らしています。もちろんガスも電気も水道も入っています。郵便も届きます。そういう訳で、本当に快適なボートハウスが岸辺に並んでいるという使い方です。

車が入りますし、物を運ぶ本当の意味での舟運というのは必要なくなりましたが、プレジャーボートや観光船、文化的な目的として、現代的な利用の仕方です。船がたくさん行き交っている訳です。



もっと驚くべきなのは、近代の港湾ゾーンです。この辺が旧市街になりますが、近代に港湾や工場が埋立てを進めて広がっていきました。

今、まさに注目されているのはこの辺りで、港湾や工業で使われた埋立地が用途を変更して、新しい住宅地になっています。



ここもフェリーが行き来していますが、このフェリーは本当にびっくりします。

あちこちの栈橋から連続的に船が出て行って、到着するとパッと前面が開いてオートバイや自転車がたくさん出てきます。すごい勢いで機能的に動いています。

もちろん通勤、通学にも使っていますが、こうした取組は日本の都市、大阪や東京でもできるのではないかと思います。



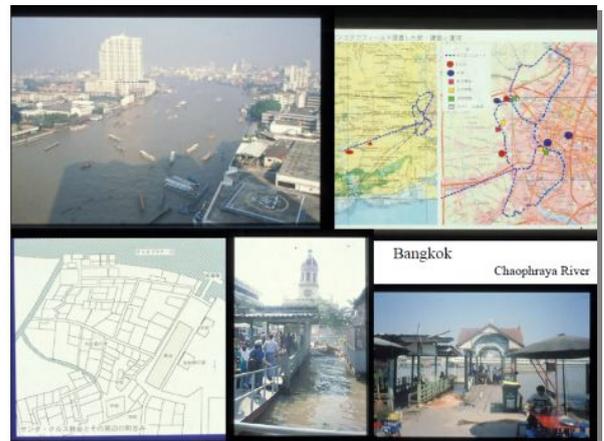
そして、そういうターミナルを造ろうという設計図です。

こういう風に工業用の埋立地だった訳ですが、その用途が変わってくるときに、マスターブ

ラン、グランドデザインのコンペティションをやって、素晴らしい案を採用し、個々の建物は違う建築家がデザインしました。低層、中層で。そして、足元には船が着けます。



もちろん少し手前のところに水門があって、水位のコントロールはされていますが、こうやって意欲的に水辺に住むということが行われています。



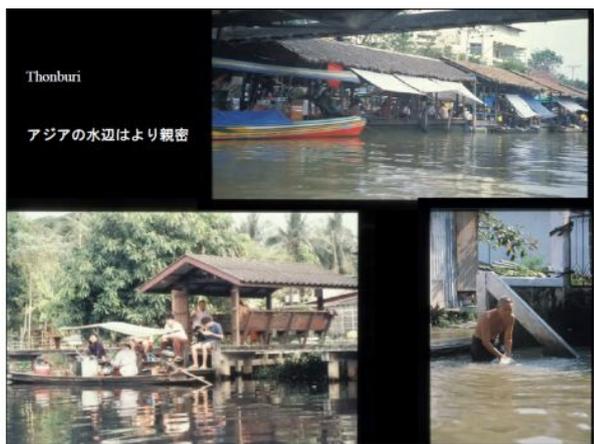
もっとトラディショナルで我々に近いアジアの例をご紹介しますが、バンコクです。

バンコクも大好きなまちなので、何回か行って実測調査までやりました。

これは自分たちが泊まっていた高層ホテルからの眺めですが、チャオプラヤ川の水運はすごいですね。

物を運ぶ船やフェリーがたくさん行き来し、観光船も通っています。

基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」



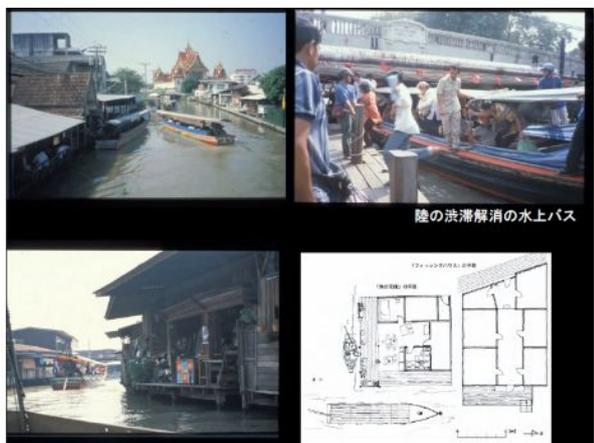
これがフェリーの船着場で、こういう船が渡しています。

大きな橋がありませんので、こうして船が今も利用されていて、本当に水と親密な関係を築いています。

今日の私のタイトルも水に親しむまちづくりとあって、どの程度日本人にとって水が親しいのかということは非常に重要なテーマだと思います。

ヨーロッパ人にとって水は、どちらかという^{みそぎ}と見る水辺になってしまいましたが、日本人の場合は、水の中に降り立って、そこで禊をする、あるいは屋形船で楽しむという、非常に水と密接な文化があるはず。アジアでは、宗教的にもそういった傾向が強いと言えます。

バンコクでは、朝シャワーを浴びる代わりに水に飛び込む習慣があります。若くてきれいな女性もそうしている姿を見るとドキッとします。そのくらい水と身体が近い関係にあります。



それからびっくりしたのは、陸が渋滞してしまうので排気ガスがものすごいことです。バスに乗っている人が、みんなハンカチで顔を押しさえているぐらいに大気が汚染されています。

その渋滞を緩和するためにこの水上バスを走らせたところ、これが大変人気で、みんな旧市街の中を行く運河の水上バスを利用しています。

これは伝統的なお茶屋さんですけれども、船をそのまま横付けしてお茶を飲んでいくということで、こういう建物も実測調査をしました。



次はいよいよ東京ですが、冒頭にもお話しましたとおり、東京は水の都市だった訳です。

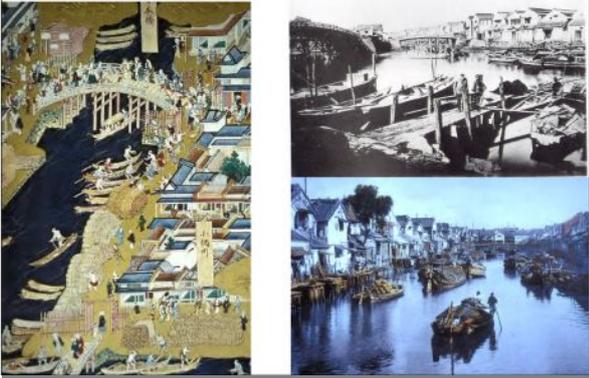


橋の袂はエキサイティングな空間でした。

おそらく徳島や大阪でも、歴史的にはそうだったと思います。これは両国広小路ですが、こんなに船がたくさん浮かんでいました。

東京ですべての船を集めて水上パレードやタイムを競わない船の市民マラソンなどを東京でもやれたらとみんな夢を語り合っています。

水辺 多様な機能、活動、意味
舟運、物流、商業活動



東京の川には色々な役割がありました。

もちろん物を運ぶ経済活動としての舟運については、大坂や知多半島辺りからもたくさんの船が来ていましたし、もちろん関東の首都圏、千葉県からもこの江戸の橋にどんどん船が入ってきていました。

ただ、そういう経済活動とか実利的なことだけではないというのが、東京の本当にすごいところですよ。



■ 聖なる要素
儀礼、祭礼

これが何だかお分かりですか。

お台場公園のビーチから都心を見ているところですが、何とこれ、12、13 艘の船が品川から水上パレードをして、ここに辿り着きつつある風景です。背後は高層ビルの都心です。



現代都市 東京の真ん中で神輿が水に入る
品川荏原神社の海中渡御 6月

これは何かと言いますと、品川に古代からある荏原神社で毎年続けられてきた、海中渡御の風景です。

遠浅の砂浜が品川にあったときには、品川でやっていました。段々と近代化に伴う開発でだめになってきて、どんどん追い立てられて、こっちの方にやってきたということで、もう何年も前からここでやっています。

これは本当に感動的で、現代の東京の都心の真ん中でこういう儀礼をやっています。

やはり水を回復させるために、水循環と水質を何とかしなくてはいけないというのが大きなテーマだと思います。全国各地でそういう取組が進められていると思いますが、東京でも少しずつやっています。



自然とエコシステムの回復

今や、
子供は水に入って遊び、
アサリが浜山とれる

この海も良くなってきていまして、今は潮干狩りもできます。本当は遊泳禁止のところみたいですが、ついつい遊んでしまいます。

このぐらいまで水質が戻ってきました。

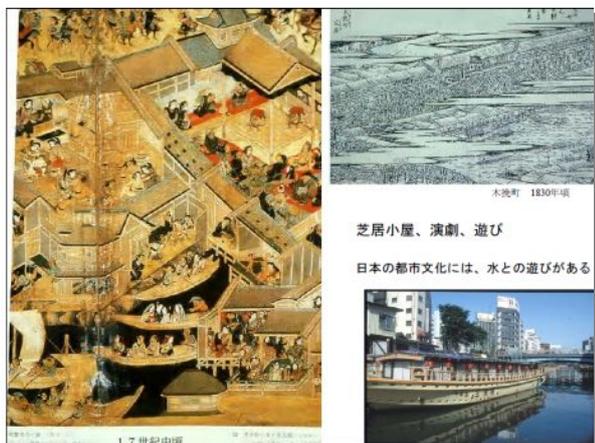
基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」



我々もよく、このEボート大会をやります。1,200人が9月末に集まってやっていますが、なかなか良い光景でしょ。現代のレインボーブリッジと都心の超高層、そして雄大な歴史的遺産であるこのお台場を舞台にやる訳です。



自分も必死に漕いでいますが、このときはお隣の昭和女子大のチームに1秒差で負けてしまいました。ともかく、本当に東京でも水辺が段々と楽しみ場が変わってきました。



本来、水辺は日本人にとって、本当に楽しめる場所でした。

こういう芝居小屋も、大阪の道頓堀がまったく同じ空間を持っていて、今も大阪の人たちは道頓堀を生かしている訳ですが、残念ながら東京はこの運河を埋めてしまいました。

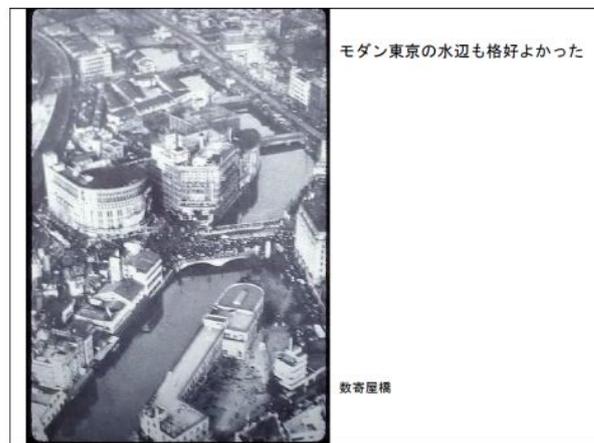
ただ屋形船はすごくて、東京には今、ものすごい数の屋形船があります。江戸時代より今のほうが、屋形船を楽しむ人は多いと思います。



そして、これから目標にすべきことは、水上バスのもっともっと系統的な展開です。

これは昭和初期の東京における水上バスの路線図ですが、まるでヴェネツィアのような感じでした。

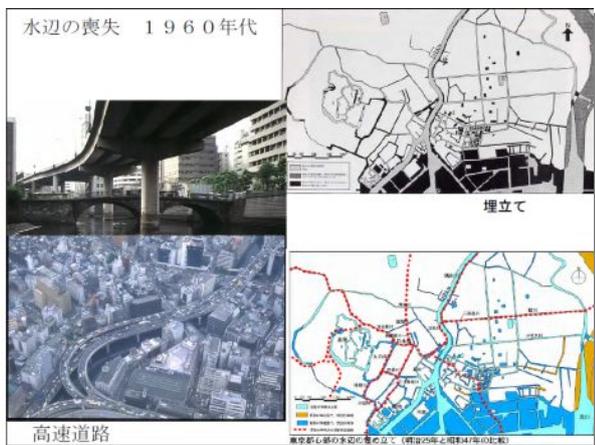
こういうフローティングの乗り場は、新橋の内側のところですので、本当にヴェネツィアとよく似ています。この水上バスは、途切れることなく細々と続いていたみたいですが、本当に水が汚れ、臭くてみんなハンカチで顔を押しさえているような写真も残っています。



昭和初期の東京の水辺も、なかなか良かったと思います。

日本の水辺というのは、実は江戸時代だけが良かった訳ではなくて、近代にも良い空間をたくさん作り上げました。ここのところは思い起こす必要があります。

福岡に行っても中州の周りにいい建築がありますし、新潟にもあります。橋や広場が、水辺を生かしながら作られていた時代があった訳ですけれども、そのことをすっかりみんな忘れてしまいました。



水辺を忘れた時代、否定した時代は、60年代です。

東京オリンピックの前に、都市を慌てて近代化するために、埋立てをどんどん進めたということもあって、受難の時代が続きました。



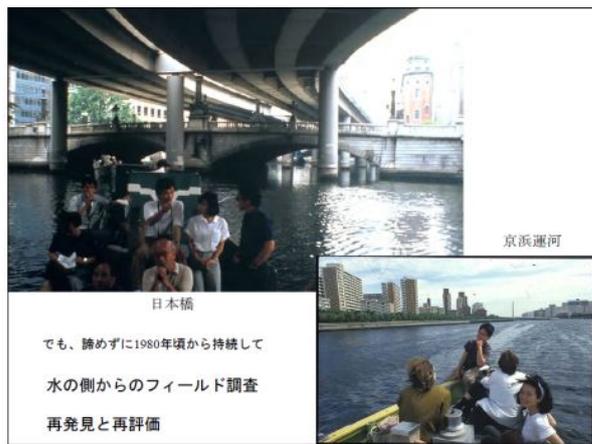
そして、こんな姿になってしまいました。

先ほどバンコクの写真を見ていただいたときに、交通渋滞の排気ガスでバスに乗っている人

がみんなハンカチで顔を押しえているという話をしましたが、東京もこんな状態でした。

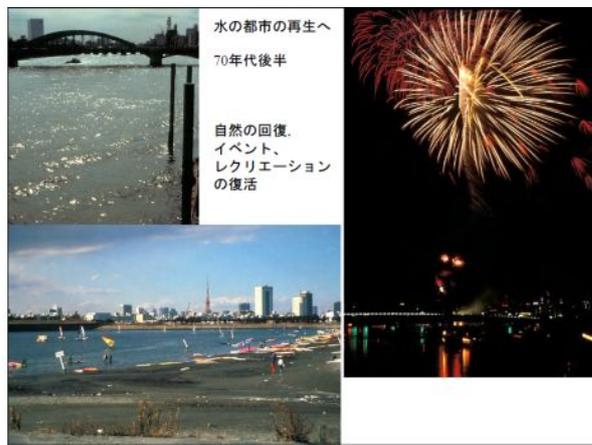
最悪だったのがちょうど1964年ごろで、その直前にはこんな柳橋の光景がありました。

これは、こういう類の料亭が今も残っている築地の「治作」という料亭ですけれども、ここにもカミソリ護岸ができてしまいましたので、今は水を見ようと思えば二階の座敷に行かざるを得ません。かつては新内流しが来ていました。



でも我々はあきらめずに、水からの調査を80年ごろからやっています、もう30年近くもこうやってウォッチングを続けています。

段々と水辺がおもしろい、価値があるということをお子さん分かってきて、今では水辺を取り戻そうという色々な動きが東京も活発になってきています。



幸いなことに、70年代後半から水辺が蘇ってき始めました。みるみる内にそういう動きが出てきました。

基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」

やはり水質が良くなると魚が戻り、人間も戻り、花火やレガッタなどのレクリエーションがもう一度復活します。

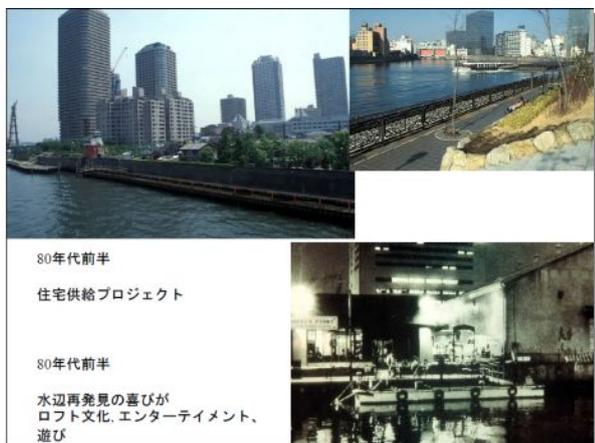
そして、新しい近代の物としてお台場公園が整備されました。これはウインドサーフィンをしているところですが、こうした新しい試みも入ってきます。



伝統的な物としては、屋形船がものすごい勢いで復活しました。

東京の中には漁師のコミュニティがたくさんありました。そういうところが補償金をもらって陸にあがってしまった訳ですけども、船宿を継承する、あるいは釣り船を経営するなどしていたのが、70年代の後半からは屋形船に変わっていきます。

これが大ヒットして、今ではあちこちに屋形船があります。



それから、段々と倉庫が余ってきて、それを利用してギャラリーやレストランやライブハウ

スなどをつくろうという動きが80年代前半にありまして、みんなで水辺を格好良く使うというブームが一度来ました。

ところが、残念ながらそのブームは長続きしなくて、ビジネス空間に置き換わっていく傾向がバブルの時代にありました。

今はまた、バブルが終わって、水辺を取り戻そうという時代が来ています。



ちょうど我々が船からウオッチングしている間に、こういう光景からこういう光景にみるみる内に変ったのを見てビックリしました。

これは宇部興産が持っている品川沖の土地ですが、これはお台場です。江戸城と同じ石垣の上に、近代の工業地帯の象徴である石油備蓄施設が乗っています。

それを新しい時代に変化させるということで、オフィス、ホテル、商業、劇場、広場、レストランの複合施設が登場しました。

時代が変わっていった中で、どういう風に水辺を変えていけば良いのかという、まちづくりの問題で、やはり水辺が快適になり、オープンスペースがただでゆったり親しめるということになってくると、散歩でみんなが集まってきます。

それから、幸い日本はようやく成熟社会に入って、都心回帰という、都心にマンションを造る時代になってきました。これは全国どこへ行っても、同じ傾向にあると思います。

そうなってくると、やはりゆとりのあるまち

づくりというのが非常に大切になってきます。

都心にオープンスペースを活かして、水辺をもっとみんなでエンジョイする、水辺のイベントにみんなで参加する、今はそういう人と人がつながっていくコミュニティを、ニューカマーの人たちも入って都心につくりなおす絶好のチャンスです。



その時に、犬の散歩コミュニティも重要です。

こういうところで、水上あるいは水辺でのコンサートなんかももっとやるべきではないかと思えます。東京の中央区も水辺がたくさんありますので、そういう提案をしています。

東京というのは常に新しい物が生まれてくるまちですが、今、一番人気があるスポットは中目黒です。中目黒というのは、代官山という渋谷から一つ目の駅のすぐそばですが、代官山は80年代に非常に人気スポットでした。



古い地図ですが、ここに川が流れていて、こっちは丘の上で、この川はしょっちゅう氾濫し

ていました。本当に最悪の川でしたが、地下に大きな貯水タンクをつくりまして治水事業にだいぶ成功しました。

そして、三面張りは三面張りですが、ここに蔦が生えて、なかなかオシャレな緑道が出来てきました。ここは有名な桜並木です。

川の氾濫もあって地価も安いということで、かつては町工場が多く、舟運も使っていたと思います。そういうものが段々変化してきて、テナント料が安いのでそこにクリエイターたちが入ってきました。そして面白い文化活動をして、それに目をつけたブティックが入り、洒落たレストランが入り、そして若い女性が集まってくるということで、本当に良い空間になってきています。

この水と緑のネットワークがある中目黒が、2000年代型のまちの典型として出てきていると思えます。



我々はしょっちゅう色々なイベントをしていますが、これは関東学院大学の河川の大家である宮村先生のゼミが、この隅田川の新大橋の袂で毎年開催しているバーベキュー大会です。

許可がいるのかからないのか分かりませんが、ゲリラ的にやってしまうと誰も文句言わないのでやっているそうです。

そうやって、どんどん水辺を使いこなしていくことが重要だと思います。ここでバーベキューをやると最高に楽しくて、ライトアップされた新大橋が非常に良い舞台背景となります。

このEボートというのは皆さんよくご存知でしょうけれども、元々、地域交流センターの田中栄治さんという方が始めました。今では全国にどんどんファンが増えて、すごい勢いで普及していきまして、東京でも遅ればせながらみんなですべてやっています。

この日本橋の下をEボートで行くとみんなが見てくれています。学生たちもプライドを持って、そして楽しんで、体で水の重要性を、ボートの楽しさを感じてくれています。もっともっと舟運を使うことをアピールしている訳です。



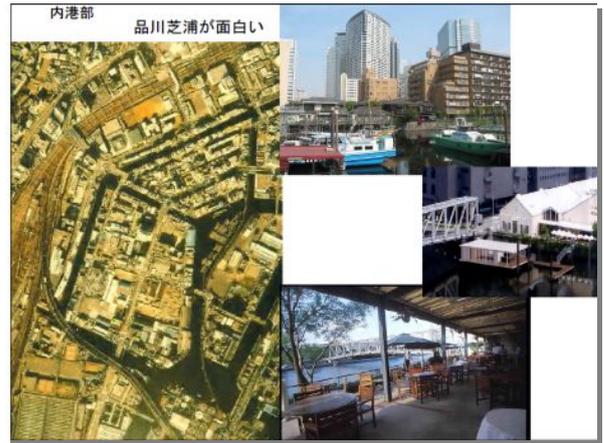
幸い東京は、途切れることなく水上バスがありまして、新しい路線もあります。

埼玉県で船会社を興した人が意欲的にチャレンジして、江戸川から小名木川に入って、隅田川、お台場公園に行くという、非常に夢のある広域ネットワークを考えていました。羽田まで行けるようにととも考えていましたけれども、残念ながらその会社は挫折してしまいました。

もっと可能性はあるし、アムステルダムやヴェネツィアの例もある訳ですから、高い目標を掲げて、みんなでどうやったら実現できるかということを考えていく時期にあると思います。

その代わり行政は、もっと船着場を柔軟に使いやすくすることです。ヴェネツィアでは誰でも船着場を使えます。

そういうことは、やろうと思えば可能であると思いますし、戦前はやっていた訳です。それがあつた時期に途切れてしまったのです。



今は品川が面白いです。

この辺は工業地帯、流通センターだった訳でして、倉庫がたくさんあります。その倉庫の中にライブハウスができたたりディスコができたたりしていた時期がありました。

そして、それが一変、バブルの時代にはオフィスブームになりました。バブルが去って、今はマンションブームになっています。

でも、やはりもっと文化機能や遊びの機能を入れなければいけないと思います。マンションだけではつまらないし、人も集まらないし、観光地にもなりません。

もっと骨太で、サステイナブル（持続可能）な、色々な時代に対応できる魅力ある空間をつくっていかねければ、ここに高層マンションばかりつくったのでは第二の多摩ニュータウンとなつて、いずれ過疎化してしまうだろうと思います。



これは、東京で初のフローティングレストラン

ンが登場した品川です。ここに寺田倉庫がありまして、大変な努力の上に初めてフローティンググレストランができました。

石原都知事がヨットマンなので、海が好きだということで、運河ルネサンスというのを東京都が始めまして、本格的な規制緩和の第一号として実現しました。

今までは、こういう場所をプライベートな事業者が利用することにはなかなか許可が出ませされたんですけど、運河ルネサンスということで、ここは地区に協議会が出来て、地元の人たちが検討した結果、認可ということで、今、非常に人気です。



高層マンションの下にこういう船着場もできていますが、ほとんど使われていません。

ここは幸い芝浦アイランドの下で、定期便がお台場公園まで出ていますし、ボートの講習会も行われているということで若干使われていますが、もっともっと自由に使えるようにしていかなければいけないし、みんなが使おうという機運をもっともっと高めていかなければいけません。

それでも東京の中では、今、一番先端的に頑張っているところの一つが、この品川・芝浦地区です。ぜひ皆さんも、おもしろいですから行ってみてください。

ここは本当に綱目のように近代の運河が巡っていて、すぐ東京湾が開いて、その向こうにお台場公園があるダイナミックなベイエリアがあ

ります。

それにプラス内側の運河、そして倉庫を活用した空間、そのすぐ内側には江戸の宿場町、品川宿がある路地が巡っています。



こういうかわいい車がやってきて、オープンカフェをやるようになりました。これは芝浦の町会が経営していますが、みんな非常に苦労しながら開設しました。

マンション住民やニューカマーにはうるさいという方もいますが、そこは時間かけて交渉をして実現したと聞いています。

こういう水辺を活かす取組には、大変な苦労もつきまとうということで、行政の問題だけではなく、住民同士の合意とといいますか、みんなで水辺を楽しもうという機運をどうすればつくれるかということが大切になります。



これは芝浦アイランドという、三井不動産がやった大規模開発ですが、この足下にNPOがカルガモの生活空間を作っています。それには

本当にビックリさせられました。ほっとさせられます。

実はここ、周りに東京都が整備したプロムナードがありますが、ここはジョギングのコースになっています。

ヒューマンスケールを超えたでかい集合住宅ですが、足元はコミュニティの空間として、水辺を活かしながら活用し始めた訳です。これは素晴らしいことだと思います。



ご覧になったことがあるかもしれませんが、NHKで「プラタモリ」という番組が始まっています。

タモリさんというのは、実はまち歩きの天才でして、民放で放送していた「タモリ倶楽部」という番組で、東京都内の色々なまち歩きを不思議な切り口でやってきました。

そこにNHKが目をつけて、もっと系統化してやろうということで、10月から15回のシリーズで始まっています。

この品川・芝浦もお手伝いして、今、ロケが終わったところですが、タモリさんも結構船が好きで、船のことをよくご存知でした。

本当にノリノリで、みんなで運河を探訪するというのをやりましたが、12月10日に放送されると思いますので、チャンスがあったらご覧ください。



こうして水辺にみんなが関心を向けてきましたので、川の駅をつくらうということをやっています。

この間も大阪で伴さんも一緒に盛り上がりました。この人がリーダーで、田中栄治さんといっています。



天神祭を2年前に拝見して、本当にビックリ仰天したので、こういうイメージもあるなということで、ざっとご紹介します。



千年も続いているそうで、天満宮から出てくる御神輿というかお宮系の船と、民間の財界や経済人の普通の船が水上ですれ違うという壮大なパノラマで、大阪の歴史と文化と生活と経済の営みと、あらゆる大阪のパワーがそれぞれ仕立てていく船に表現されています。



そして、エールの交換を行いながらすれ違って、水上で出会いとドラマが起こるということで、こんなにダイナミックな水上のパフォーマンスは世界中を探してもないのではないかと思います。

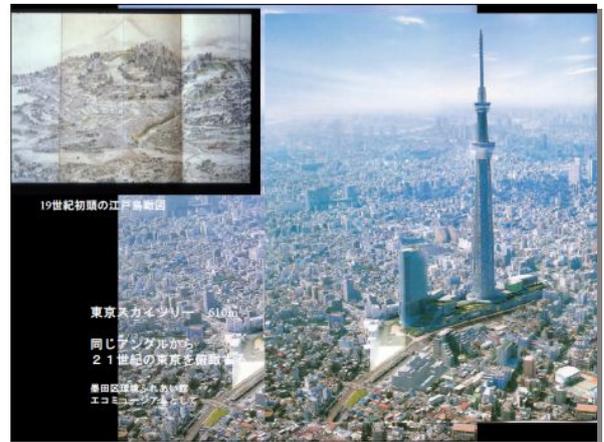


さすがのヴェネツィアにもありませんし、ましてや東京はこれにとっても追いつかないということで、大阪のすごさに本当に感嘆しました。花火が行く先々で打ち上げられる訳です。

このように、日本人にとっての原点というものがあると思いますが、実はどこのまちにも、かつては同じようなことがあったのではないかと思います。

一つは、我々の遺伝子の中に元々ある、水との深いつながりをもう一度認識すること。

そしてもう一つは、伝統だけでは駄目で、新しい創意工夫をして、現代でなければ考えられないことを創り出すということが大切です。



今度、こういうものが東京にできます。第二東京タワー。都民の応募で「東京スカイツリー」という名前になりましたが、高さは634mです。

これが江戸の鳥瞰図で、よくこのアングルで描かれていました。

この位置にタワーができるということで、江戸時代の人たちが鳥瞰図を描いたときと同じアングルで、我々が東京を見ることができます。

ここから水のネットワークを全部把握することができますので、隅田川、神田川、皇居の外堀という水の循環系が想像できます。秩父、奥多摩から水が流れてきて隅田川に入り、東京湾に入る循環系を想像するという、すごく壮大なパノラマです。



そこに、エコをテーマとした「環境ふれあい館」という施設を墨田区がつくってくれることとなりまして、今、基本設計から実施設計をみんなで練っているところです。



ここにできるということで、幸いここには北十間川、横十間川、そして小名木川、旧中川、荒川、隅田川という水の循環系があります。

それをもう一度復活させようということをみんなで検討して、色々なNPOも今ではできています。



そしてロックゲートが2つありますが、本当はこここのところを貫いて、船で回れるようにしたいと思っています。

この間も水陸両用の船を運航されている方とお話をして、「ここってそういう船を使えばいけるよね。」という話で盛り上がりましたが、もしそんなことができれば、東京を東側から全部見て回ることができます。



東京というのは多様な水辺があって、それが非常に安定している訳です。水害はもうほとんど起こらないで済むという水域もあります。

そこをもっともっと市民が使っていけば、楽しめる、親しめる、そういう舞台が揃っている訳です。今はまだまだ使われていませんので、これからです。



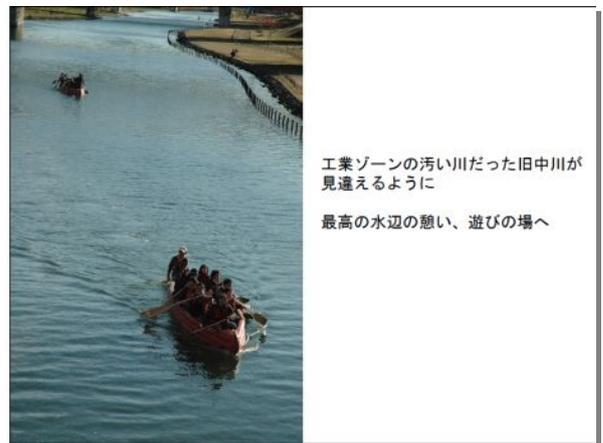
今までこの周りは工業ゾーンでした。そして水質が本当に良くなってきました。



活用されていない水辺に至る所に



こういう橋もできました。この橋は、この上でコンサートをやったり色々マーケットをやったり、NPOをはじめとする市民の活動がだいぶ盛り上がってきている深川の方ですけれども、クローバー橋といいます。



工業ゾーンの汚い川だった旧中川が見違えるように

最高の水辺の憩い、遊びの場へ

こうやって見違えるようになってきているゾーンを、市民がこれからどう生かしていくかということに大変興味を持っています。



このロックゲートは荒川に出るところですが、スペクタクルで面白い経験ができます。



ボート、自転車、徒歩で地域を巡るエコツーリズムの創造

さっきの環境ふれあい館から、船や自転車、徒歩で出かけます。この辺りを名勝や旧跡、おもしろい商店街、下町の工房、最先端の技術を持っている企業などがあるエコミュージアムにしていこうということを考えています。

基調講演「川を活かし、水に親しむまちづくり」

ここにカナルカフェというのがあります。

大正7年にボート小屋として生まれ、代々、水辺を守り、育ててきたファミリーがいて、最近では水上イタリアレストランになっています。



そこと連携してイベントや水質浄化の色々な活動もしています。ワークショップもやっています。そして、このようにボートからジャズを聴く活動をして、みんなで盛り上げています。

東京は広くて色々な活動がありますので、そういうものを一つにまとめていくのは大変ですが、大阪がそういう点で大変成功されていますので、後ほどお聞かせいただく伴さんのお話や全国の素晴らしい成功事例からヒントを得ながら、水に親しむまちづくりをもっとやっていきたいと思っています。

東京にはまだ知られていない水辺がたくさんあって、すごく可能性があると思いますので。

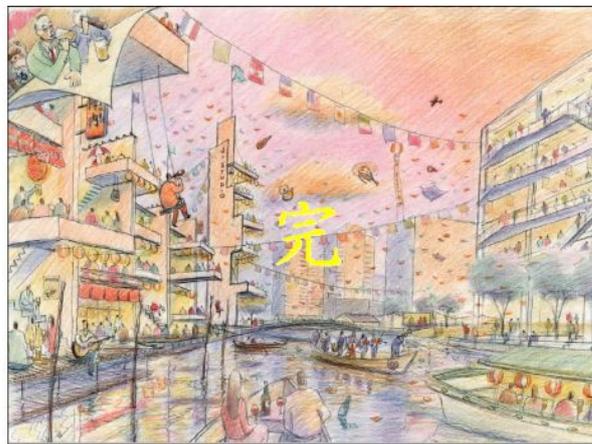
後の議論を大変楽しみにしています。どうもありがとうございました。



4分の1ぐらいですが、ビオトープもできています。

我々の法政大学はここに本校がありますが、すぐ足下に外堀や石垣、史跡がありますので、そういうところを活用して、毎年、水上ジャズコンサートをやっています。

自分たちがやっているということもありますが、これが我々東京としてはご自慢です。



事例報告1

人と人、街とまちを結ぶ雁木タクシー

NPO 法人雁木（がんぎ）組 理事長 氏原 睦子 氏

明治学院大学法学部を卒業後、東京の設計事務所で公園や川の設計に携わる。現在は広島・信州を拠点にまちづくりコンサルタントとして活躍。NPO 法人雁木組の事務局長を経て、2006年から理事長に就任。広島の歴史的資産である雁木を活用した水上タクシーの運航や文化活動など、水辺のまちづくりに取り組んでいる。



こんにちは。NPO法人雁木組の氏原睦子と申します。私たちは広島の水辺のまちづくりを目的としたNPOです。

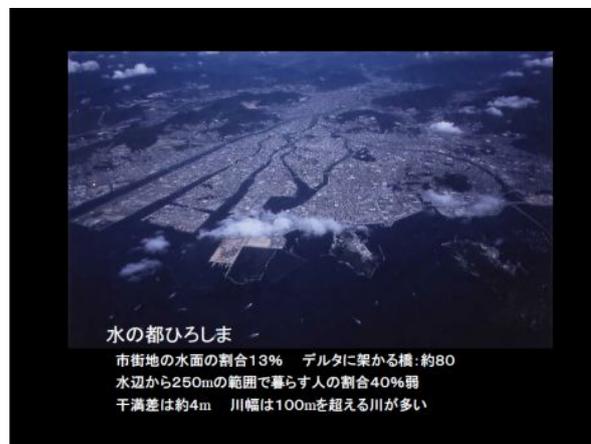
コアメンバーが約20名、緩やかな応援者が約200名という構成で活動していきまして、今、結成から丸5年がたとうとしています。

今日は、雁木タクシーと言う、少し聞きなれないかもしれませんが、恐らく日本で初めて川の水上タクシーと銘打って始めた運航の戦いの歴史なども含めて、お話させていただければと思います。

まずは、広島の水の都自慢をさせていただきたいのですが、これは広島の街なかです。広島というのは、デルタの形の中を6本の川が流れていきまして、水と緑にあふれたとても素敵なまちです。



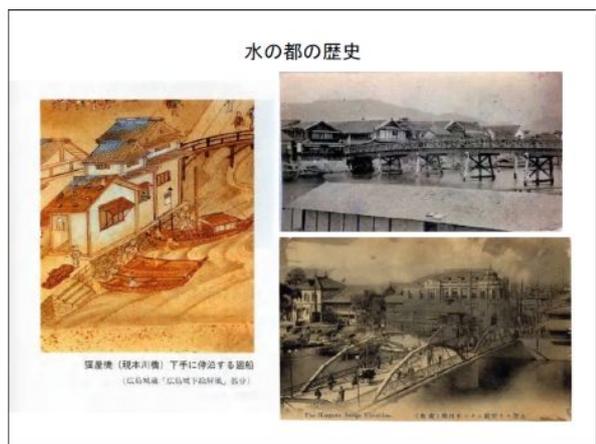
特に、戦後復興で広島市が頑張ってきたこともありまして、工場地帯を除く水辺のほとんどもに河岸緑地を持っています。これは、ちょうど上空から海側を見た写真になります。



逆に海から見ると、こんなデルタの形をしていて、1辺が大体6kmぐらいの市街地です。

データで申しあげますと、この市街地における水面の割合は 13%、そしてこのデルタ内に架かる橋は約 80、水辺から 250mの範囲内に暮らす人の割合は、住む人や学校に通う人を含めて約 4 割です。

それから、干満差は約 4mということで、日本で有明海に次いで干満の大きなまちです。そして、川幅は 100mを超える川が多いという、そんな特徴を持ったまちです。



歴史的には江戸、大阪に負けず、やはり水の都として栄えた歴史を持っています。

元々、今の広島は街なかには島だったということで、川の護岸を造ることによってまちの骨格がはっきりしてきている、つまり川をつくることそのものが広島のまちづくりであったと言っても良いわけです。



これは、平和公園から船で 5 分程上がったところですが、少し振り向くとこんな風景を今でもまったく変わらない状況で見ることができま

す。明治時代には、このような船が行き交っていたとのことでした。



これは京橋川といいまして、戦前の町家雁木の様子です。この 1 軒 1 軒に、雁木というこれから説明しますが、階段のようなものがあるのを見て取れるかと思えます。

広島の水における水上交通の課題

- 1 干満差(1日平均最大で4m弱)が大きく、満潮時は船が橋にぶつかり、干潮時は底をつく。
→川底の浚渫には費用がかかる
- 2 棧橋がない
6本の川に、利用できる棧橋は2つだけ。既存棧橋は営業利用が難。安全性も問題。
↓
今ある素材を生かして、できることから。

広島の水における水上交通の課題というのは大きく 2 つありました。

まず 1 つ目は、1 日平均最大で 4m という干満差があるので、満潮時には船が橋にぶつかって、干潮時には底をついてしまうということです。

それならば、川底の浚渫をすれば良いじゃないかという声もありますが、そうすると 80 億円ぐらいかかるそうです。そして 10 年に 1 度ぐらいは、また浚渫をしなければいけないという問題があるそうです。

それから 2 つ目の課題は、棧橋がないことでした。

水の都として水上交通を便利なものにするた

事例報告1 「人と人、街とまちを結ぶ雁木タクシー」

めには、乗り場が数箇所という訳にはいきませんが、今、国交省が持っている栈橋は2つだけです。しかも、この既存の栈橋については、私たちが営業利用するのは非常に難しい。

なぜこんなものを今でもつくっているのかと国交省にお尋ねしたら、「何かあったときに上に上られるように。」と普通に答えてくれるのが、やはり広島らしいなと思いました。



それで私たちは、今ある素材を活かして、できることから始めようと考えました。それが、この雁木を利用することでした。

雁木というのは、どのような潮位でも船が付けられるものとして発達しました。こういう大きな、材木などを降ろすための公共的な雁木があれば、それぞれの家につながる雁木もあります。



この400の雁木を船着場として利用しようと活動を始めまして、今では約50箇所、60箇所に近いですが、雁木を乗り場として利用しています。

このように古い雁木もあれば、新しいものもあります。これは最近の雁木ですが、背後地を必要としない護岸の一部として階段があります。これを利用しています。



私たちが調べたところ、この雁木がまちに400近くもありました。

これは新旧含めてですが、古い雁木ももちろん素敵ですが、広島の素晴らしいところは、高潮対策事業として新たに整備している護岸にも、こういう階段を造り続けているところだと思います。



私たちが雁木を利用することとした着眼点を整理しますと、まず栈橋がなくても大丈夫で、今すぐ出来るし、初期投資が不要ということ。

それから、まちの至るところで乗り降りができること。

それから、観光集客施設の近くに雁木があること。街なかに400も雁木があれば、どこの施

設からも歩いて 5 分も行けば雁木があるという状況です。

それから、広島に合っていて、安全なはずだということ。というのも、当初、この雁木で乗り降りをするということに対して、とても安全の疑問視をする声が多くありました。

ある意味で私たちは、固定概念と戦ってきたようなところがありますけれども、川で浮き桟橋というのがなぜ安全なのかと思います。

雁木は石そのもの、護岸そのものですから、絶対動くことはありませんし、安全です。

使い方を工夫すれば、やはり先人たちの知恵が集積しておりますので、とても安全ということを私たちが実証したなと思っております。

それから、広島の文化を考えるきっかけになるのではないかとということ。

それから最後に、まちの財産である、この雁木を使いながら残すことができるということに着眼点を持ちました。

雁木タクシーの運航状況

- ・小型船舶2艇にて運航
- ・2004年10月にスタート(NPO法人化)
- ・これまでに25,000名が乗船
- ・地元5割、来訪者5割
- ・平和公園～京橋カフェ のコースが人気
- ・利用できる雁木は50ヶ所
- ・料金は2km単位500円から。



現在の雁木タクシーの運航状況ですが、この6人乗りのボート 2 艇で運航しておりまして、これまでに2万5千人が乗船しました。

2万5千人というと、1ヶ月の乗船者数ですと言われてもおかしくありませんが、5年間の数字です。地元の方が半分、来訪者の方が半分といったところですよ。

今は、約30分のコースが人気です。料金はタクシーなので、一応距離単位で、2km500円からという体制をとっております。



どんな方が利用するかというと、これは水辺の職場に船で移動された方です。



それから、広島は海外の方が多くいますが、海外の方は非常に船がお好きです。

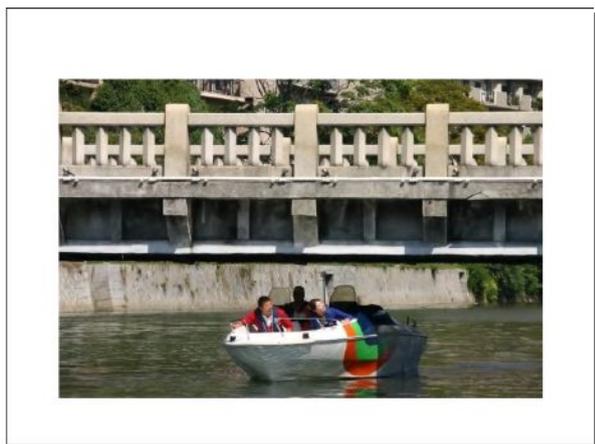


これは、最初に5万円で手に入れた船の時代のものですが、このときは菜の花燃料を使っています。地元の高校生が自転車を乗せてクラブ活動に向かう、そんな利用シーンです。

事例報告1 「人と人、街とまちを結ぶ雁木タクシー」



この雁木タクシーの見どころとしましては、街なかであるにも関わらず、非常に自然豊かなまちの様子を見られること、それから、平和記念公園の原爆ドームなどの観光施設も見られることです。



潮が満潮の時には、みんなでこんな風に頭を下げます。その後ろには、明治時代の古い雁木が残っているのも見えます。

私たちが、この雁木を使った水上交通を復活させるには、本当に色々な課題がありました。どこの行政機関に行っても、「氏原さん、悪いことは言わないから止めたほうがいいよ。」と、本当に言われましたが、そう簡単に引き下がる訳にもいきませんし、みんなでなんとか乗り越えてきたという歴史があります。

まず、この雁木を利用するのに、河川管理者が国であったり県であったりする訳ですけども、この管理をどうするのかということが問題でした。

最初はこの雁木を使うのに許可申請を出してくださいということでしたが、その許可をしてしまうと何かあったときに河川管理者に責任がいくってしまうということで、現在は自由使用の範囲ということになっています。



そういうことで、私たちが使う雁木50箇所を常にきれいにする努力をしております。



それから、いわゆる棧橋がなく、こういう雁木で乗り降りしていますので、必ず船長のほかに陸上スタッフがボランティアで付いています。

とはいっても、50箇所の乗り場があって、船が2艇しかありませんので、50箇所にいつも人が付いている訳にはいきません。

例えば、これは平和公園ですけども、ここでお客さんを乗せると、スタッフが一緒に乗っていくこともありますし、人数的に乗れない場合は自転車で先回りして、お客様が降りるところで待っていて陸上フォローをするという、大変地道な取組をしています。



それから、ここにいるスタッフ全員がボランティアですけれども、たとえボランティアとはいえど、やはり運航事業者として安全についてはかなり厳しい視点を自ら持たなければならないということで、こういう講習会などを開いています。



それから、この干潮河川ですが、これが本当に運航の支障になりました。

満潮のときには、ここからポンと乗れば良いのですが、潮位が100cmに下がってしまうとこんな状況です。もっと潮位が下がって、マイナスになることもあります。

こうなったときに、どのように船に乗るかというのは日々工夫しています。

写真にはありませんが、船を縦にして簡単な手で持ってくる事ができる栈橋を用意して対応することもあります。



それから、こういう乗り方の工夫とともに、川や雁木の情報の収集が、私たちの安全を守るためにも重要になります。

決まった航路がありませんので、自分たちで常に川の状況を把握して航路を作っています。干潮のときに自転車で回って、流木がないかなどといったことをチェックしています。



マイクロソフトさんに支援していただいて、400箇所全ての雁木のデータを自分たちで作りました。それをパソコンや携帯から、例えば12月7日、広島駅は朝8時半から午後2時40分まで着岸ができますというような情報を検索できるようにしています。その情報を船長に指示して、運航している状況です。

事例報告1 「人と人、街とまちを結ぶ雁木タクシー」

水の都観光の魅力

- 水辺に観光施設が多い
 - ・世界遺産原爆ドーム ・縮景園
- 水辺に商業施設・ホテルが多い
- 水辺に集客施設が多い
 - ・国際会議場
 - ・アルソックホール
 - ・厚生年金会館
 - ・アステールプラザ
 - ・マツダ球場

観光をキーワードにした連携

- シティガイド
- 縮景園クルーズ
- 牡蠣レストランとの連携



ズームズーム球場様



水の都の観光の魅力というのはたくさんありますが、私たちは壁を企画に変えたり、水の魅力を自ら創り出したりする取組をしています。



- 1 太田川産しじみのPR(色、大きさの特徴)
- 2 生産者表示
- 3 稚貝の放流と看板づくり

広島市商店街活性化支援事業に0円の助成申請





例えば、広島ではシジミ漁が行われていますけれども、最初は私たちの船がこのしじみ漁の邪魔になっていました。理事会でも、「雁木タクシーは大変迷惑だから年内にぶっ潰す。」などという一行が残っているような関係に一時はなりましたが、私たちも謝りまして、今はお互いに理解しあいながら、広島の大田川産のしじみをPRする活動をしています。

<雁木タクシーの運営方針>

- 1 自然現象(潮位変動)つきあい、広島らしい運航スタイルを構築
 - 「チーム6.0 hour」
- 2 環境に優しい運航スタイルの構築
- 3 ソフト先行。実績をつくることから。
- 4 壁は企画にかえる ～様々なプロジェクトが生まれる～
- 5 水辺の魅力は自らづくりです

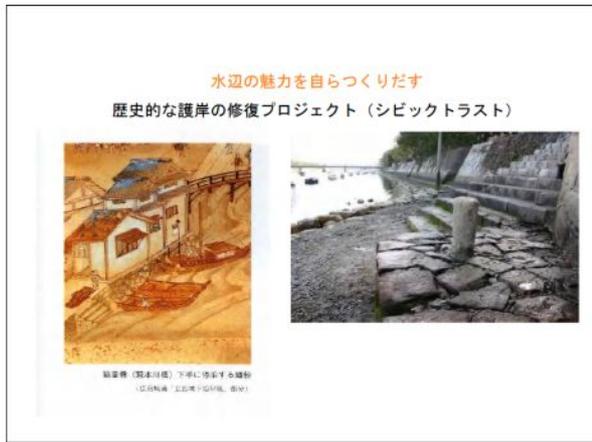


水辺の魅力を自らづくりです
～歴史的雁木の保存活用プロジェクト～



他にも、古い雁木について土木遺産としての価値が全然認められていなかったのので、私たちは独自にこの調査をしまして、とても価値のあるものだということを訴えました。

今は、ようやく土木學會の選奨土木遺産に指定されています。



それから、水辺の魅力を自ら創り出すということで、これは2年前にやりましたが、広島は水の都であったため、舟つなぎ石が昔はたくさんあったそうです。だけど、あったと言われるところにはありませんでした。

地元の人には、こういう大切なものは捨てないと言ったので、捨てないのであればどこかに落ちているのではないかとということで、干潮のときにみんなで探しましたところ、本当にこの辺に落ちていました。これを拾ってきて、上流の石工さんに頼んで一緒に積みなおすという作業などをしております。



そして、こういう運航を続ける中で、結婚式で使っていたり、修学旅行生が流したとうろうを下流の方で拾う活動をしたりという、思いもよらなかった利用の仕方もしていただいています。



また、意外と知られていなかった広島の伝統文化を水上から見てもらうということにも取り組んでいます。





それから、広島の水辺は大変市民活動が盛んですので、こういう取組をしている人たちと組んでナイトクルーズをしたり、アートのお手伝いをしたりとかということもしています。

- ・まちづくり =(イコール) ボランティア の勘違い
- ・乗船料をいただくことの大変さ、大切さ。
ボランティアでもプロ意識。そこには気概と誇り
- ・非営利のプロジェクトもビジネスの発想
- ・まちは住む人の営みがつくるもの
- ・企業もまちづくりの担い手

私たちが今取り組んでいることは、まちづくりというイメージがありますが、元々、水辺は旦那衆が作ったものだということで、旦那衆の貢献というのは大きいのではないかと考えています。



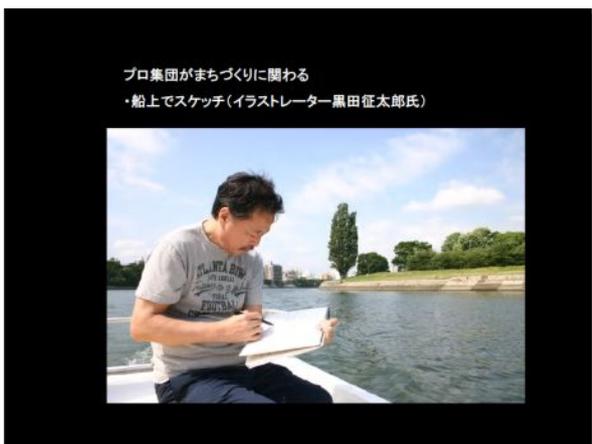
それで、水辺の企業さんに呼びかけて、こういうジャズコンサートなどを一緒にする仕掛けをしながら、企業とともに活動をしています。

そして、私たちはボランティアが中心ですが、やはり採算の取れる、継続性のある事業をしていきたいということは常に意識しています。ボランティアに関わる仲間として、自分のプロ性

を提供して下さる方にも協力していただいております。



これが雁木タクシーのポスターですが、色の専門家に頼みました。オレンジというのは命を表す色、そして水を育む緑、そして文化や物語をつくる紫という基調カラーです。



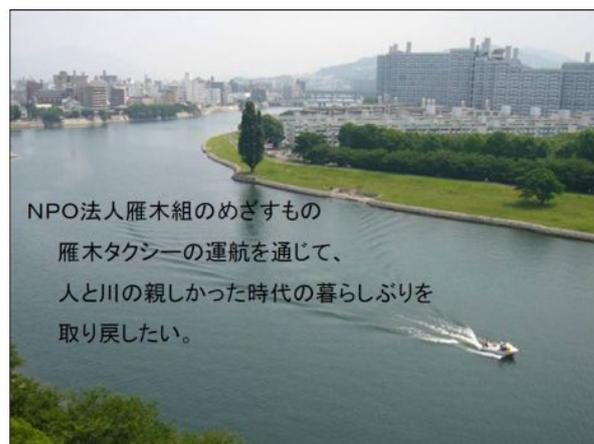
デザインにもプロのデザイナーの方に関わっていただいています。



最後に私たちの仲間を紹介します。

「ガンギーズ」という高校生のときから関わってくれている子たちや、あるいは会社の社長さん、左下はタバコ屋さん、右下の陸上スタッフは市役所の職員の方、こういう仲間たちがこの運航を支えています。

また、この船を買うときには、200人の小さなオーナーを募って、「雁木メイト」として皆さんに応援をしていただいております。



最後に、私たち雁木組が目指すものは、この雁木タクシーの運航を通じて、人と川が親しかった頃の暮らしを取り戻したい、そんな想いで、そして、まちは水辺から変えるという、ちょっと半分勘違いのようなそんな気概を持って、毎日活動しています。

ありがとうございました。

事例報告2

水都大阪・水辺の賑わいづくり

伴ピーアール株式会社 代表取締役 伴 一郎 氏

尼崎市職員、広告代理店勤務等を経て、1986年に伴ピーアール株式会社を設立。関西国際空港開港イベントの一環として、豪州ブリスベンで30万人規模の天神祭を成功に導く。水上タクシーの運航のほか、「平成 OSAKA 天の川伝説」イベントなど、地域の伝統文化を守りながら、新しい形の水辺イベントの企画・運営に取り組んでいる。

第15回 水の郷サミット

水都大阪・水辺の賑わいづくり

伴ピーアール株式会社
代表取締役 伴 一郎
(天神祭美化委員長)



口の字型に市内をめぐる川

どうも、伴といいます。

これは、今現在の大阪市内の中心部の川です。ここは自然河川ですが、これが琵琶湖の方からずっと流れてきています。

100年前に新淀川という川ができて、大阪湾に

流れ込んでいますが、元々100年前までは、すべての川がここに流れ込んでいました。

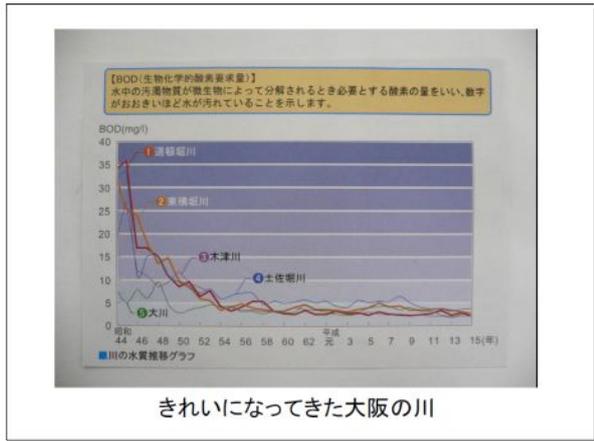
そしてここが土佐堀川、南に下ると大阪城の外堀の東横堀川、ここから道頓堀川になる訳です。グリコの看板はこの辺です。ずっと流れてきて、海につながります。こういった口の字型の運河が大阪には残されています。この辺が大阪駅で、ここが難波です。

この市内中心部を流れている口の字型の川を、みんなで何とかしようという機運が大阪で盛り上がってきたのは、2003年の「第3回世界水フォーラム」という国際会議のときでした。

滋賀、京都、大阪の3ヶ所で世界中の水問題について話し合った訳ですが、そのときに盛り上がってきました。

また、その少し前になりますが、平成9年に法律が変わったということも大きな要因の一つでした。平成9年までの河川法では、治水と利水については触れられていましたが、平成9年以降には、治水と利水にプラス、親水ということが取り上げられるようになりました。

それ以来、大阪では俄然、水辺の賑わいづくりが動き出しまして、現在では17ヶ所の船着場がございます。そして川の駅がどんどんできているという状態です。



ちょうど50年程前の物語になりますが、小説家の宮本輝さんがお書きになった「泥の川」という小説がございます。

本当に大阪の川は汚かった訳ですけども、どんどん水質がきれいになって、今では本当にきれいになっています。

先ほどの川でも、鮎とか鰻とか、天然の魚がたくさん泳ぎだしましたので、ちょうど舟遊びや水遊びに良い環境です。

先ほど陣内先生のご講演でお見せいただいた昔の隅田川の写真のように、水辺で鼻を押さえないといけないような状況では、とても水都再生にはつながりません。

これだけ水がきれいになってきたということも、大阪で水を生かしたまちづくりが進みだした理由の1つです。



これは天満橋の船着場です。八軒家浜といいまして、その当時は雁木でしたが、今はまったく新しい形になっています。

江戸時代の三十石船は、ここから上流にある京都の伏見まで12時間かけて行っていました。夕方6時ごろに船に乗って、翌朝の6時に京都伏見の寺田屋の前に着きます。京都の方からは、6時間で大阪まで下りて来ることができます。

そして、そこからまた大きな船に乗って、徳島や鞆の浦など、瀬戸内を回っていました。



これが、新しくなった現在の八軒家浜です。

この浮き桟橋ですが、約105mの長さがあります。コンクリートで造った35mの橋を、3つないでいます。高さですが、1.5m沈めまして、50cmだけ浮かべています。

これは、中之島公園の一番東の先にある剣先公園です。こっちが土佐堀川、こっちが堂島川で、ずっと向こうに流れて行っています。



これが、先ほど陣内先生にご紹介いただきました天神祭です。今年の天神祭が1058回目ということで、1058年もの間、天神祭をやっています。天神祭には、毎年3時間で10億円を使ってい

事例報告2 「水都大阪・水辺の賑わいづくり」

ますが、それに行政のお金はまったく入っていません。みんなが出し合って、毎年3時間のために10億円を使っています。

天神祭には火を使います。そして提灯。水に映る火というのは、みんな自分に向かってくるように見えます。夕日でもそうです。夕日を見ると、全部自分のほうに向かって来るように見えます。光というのは、基本的に自分のほうに向かって、目の前までつながろうとする特性を持っています。

そして、これらの船の中には文楽船があったり、色々な能をしていたりするものもありまして、歌舞音曲がずっとぐるぐる回っています。天神祭には3時間で100万人が集りますが、その中を音楽や芝居をしながら回ります。

天神祭というのは、365日のうち364日はみんな神社の方にお参りしますが、1日だけ天神さんの家庭訪問があるということで、氏子のところを回りましょうというお祭りです。

これにみんながお金を出し合う訳ですから、名前はついていないものの巨大なNPOみたいなものです。

祭りの日は、船の上に14,000人もの人に乗っています。そして、河川敷に100万人の見物客。そして、警察官が1,500人に、プラス民間のガードマンが約1,000人います。

そういう祭りが、毎年7月25日に開かれる天神祭です。出るごみが大体400、500トンありますが、それもボランティアで回収しています。



300年前に大阪で生まれた物語「一寸法師」のお椀のレース

これは、大阪の子どもたちに、大阪で生まれた物語である一寸法師を知ってもらおうと企画したイベントです。

一寸法師は、大阪の出版社が300年前に作った物語だということで、大阪の子どもたちにも自分たちの御伽噺がどういうものかを知ってもらうために、こうしたお椀の船のレースを開きました。ミス道頓堀やミス宋右衛門町の対抗レースです。

そうすると、すぐにスポンサーが付きます。タケヤマをはじめ色々なスポンサーがついて、費用はまかなえます。



これは新しくなった道頓堀で、こちらは水上タクシーです。これは夜の道頓堀です。

道頓堀はこちら側が東で、向こう側が西ですので、夕方になるとここに夕日が映り込むという、美しい演出があります。

先ほどお話しました天神祭を行っているところも、東から西に向かって川が流れていますので、夕日が映り込む風景を楽しむことができます。

私たちは、そうやって夕日が映り込む川を文化軸、そして、木津川や東御堀川などは経済軸という川の位置付けをして、色々なことをやっています。



市民手作りの棧橋(中之島公園) 2004年イベント

これは、2004年のイベントの写真です。

このとき、行政に棧橋を造って水上タクシーが停まれるようにして欲しいとお願いしましたところ、「長いこと棧橋なんて造ったことがない。」と言われてまして、そして「ここまでが大阪府で、ここから大阪市です。ここの植え込みが公園で、こういうものは民間に造らせたならロクなことがない。自分たちが造るのであれば2,000万円ぐらいかかります。君たちが造るのならいくらでできますか。」と言われていたので、「20万円でできます。」と答えました。

2週間ほどのイベントでしたから、そんなたいそうなものは要りませんということで、ホームセンターで材料を買ってきて、すべて自分たちでこれを造りましたが、大体20万円でできました。そこにたくさんの方が遊びに来て、「大阪府も大阪市も、やる気になったらきれいにできるね。」と言われてたとき、近くにいた大阪市の人は笑っていました。



ライトアップされる大阪の川

大阪の水辺は、段々ときれいになってきています。これが夜の堂島川と土佐堀川です。こういう風に、水に光が映り込む演出がされています。

これが中之島公園で、そこに水上タクシーが停まります。これは天神橋で、これが市役所横の水晶橋です。夜は大体こんな感じです。



市民参加による水辺のにぎわい(淀屋橋)

これは世界水フォーラムのときですが、最近はこのeボートの大会を学生さんに呼びかけると、すぐに参加していただけます。

これは昔、川の渡しで使っていた大阪市の船ですが、それを払い下げてもらって観光船にしたり、水上タクシーが来たりということ、街の真ん中でやっています。



船を使って伝統文化や芸能をアピール

これは世界水フォーラムのときに、琵琶湖の近江八幡から祭りで使う葦を持ってきてもらって、水フォーラムのイベントを盛り上げてもらっているところです。そして伝統芸能を披露しています。ここも道頓堀ですね。

事例報告2 「水都大阪・水辺の賑わいづくり」



琵琶湖淀川流域連携事業として、天神祭の茅の輪くぐりのヨシを奉納

こんな形で琵琶湖のほうから漕いで来てもらいました。琵琶湖も京都も大阪も、水でつながっているという流域連携のイベントで、みんな喜んでくれました。天ヶ瀬ダムがありますから、途中でトラックに乗せてまた降ろしてきました。



現代風三十石舟

これは昔、八軒家浜からでていた三十石舟を現代風の大阪モデルで造ったものです。

大阪は橋が低く、1m20cmぐらいで船が引かかるので、掘りごたつ形式にしています。



大阪ビジネスパーク



東横堀川(大阪城外濠)

ビジネスパークという施設が大阪城の隣にあります。こういう近代的な高層ビルと、古い大阪城の外堀がつながっています。

昔の東海道五十七次は、日本橋をスタートして、この大阪の高麗橋が終点でした。今も三越は東京の日本橋のところにありますけれども、少し前まで大坂も高麗橋のところにありました。江戸時代でいうと三井・越後屋さんですね。



淀川の砂でビーチ
～FIVB 女子ビーチバレー ワールドツアー in 中之島～

これは、淀川の砂を使ってビーチバレーの大会をした写真です。中之島公園でやりました。

八軒家浜の少し上流から淀川の砂を持ってきました。世界中23カ国の人たちがここでビーチバレーをしました。

元々、中之島や北浜、堂島浜というのは砂浜ですから、その砂を使ってビーチバレーをしようということで、去年と今年の2回やりました。



水都大阪2009ポスター

変なポスターですけども、こちらが橋下大阪府知事で、こちらが平松大阪市長です。

今年は、新淀川ができてちょうど100年にな

ります。そこで、水都再生をテーマに水辺の賑わいをつくり出そうということで、こういうポスターに出ておられます。

ただ、これの市民や府民の反応は、「水を生かそうというよりも、川で溺れているように見える。」とっていました。

元々、弁護士としてタレントをしておられた知事さんと、毎日放送のアナウンサーをされていた市長さんということで、この辺は非常にノリが良かったです。



これは市民の寄附で作ったアヒルで、水都大阪 2009 の期間中、川の上にはずっと浮かべていました。

イベント初日の前夜祭で膨らましたときに割れてしまいましたが、イベントが始まった日にはありませんでしたが、それから 2 週間かけてまた縫い合わせました。

高さが 10mほどあります。そして、こういうふうに水上タクシーが停まります。屋形船でアヒルを見に来ます。

フワフワのアヒルですけれども、本当にお風呂に浮かべているアヒルの巨大なものですね。写真を撮りに来て、みんなでわいわい言っています。

ここで色々なイベントがありまして、船の上に首の高さが 5、6m の高さのドラゴンを作って、水や火を吹かせるということもしていました。



近づいて見るとこんな感じです。



これが先ほどお話したドラゴンボートです。舟にこういう加工して、ユニックみたいなものですが、そこに龍をいれて、アヒルの横で水や火を吹かせたりしました。あまりアヒルに近づいてはいけません。焼き鳥になってしまうので。

このラッキードラゴンを見たらみんな幸せになりますよということで、市民も企業も一緒になってやっています。



これは、天満橋の川の駅に新しくできた雁木です。この大賀さんという人が中心になって、ここで子どもたちのカヌー教室など色々なことをやっています。



花に見立てた風車(中之島公園)

これは中之島公園の剣先公園に作られたアートです。真夏の暑いときに花はなかなか上手く育たないので、風車がくるくる回るように作りました。遠目にみたら花に見えますので、かなりきれいでした。



大阪中央市場の人たちによる朝市

最近、水辺にどんどんこういうお店やオシャレなものが建ってきています。これも川の駅です。

ここは、ずっと今までカミソリ堤防でしたが、こちらの土地の上にも土を乗せて、ここを低くしてスーパー堤防になっています。

市民がここまで降りてくることができます。そして、ここが全部中央市場の方の屋台です。伊勢海老を焼いたものが200円だとか、ものすごく安い値段で売られています。



東横堀川の「川の駅」

これも川の駅で、これはうちの船です。天神祭のゴミ掃除もしたりする船ですが、こういう船で行き交っています。

これは関係者ばかりなので、ほとんどがおじさんです。



祭でにぎわう道頓堀川

昔のように道頓堀川には、祭りのときに色々な船が入ってくるようになりました。

大阪の夏祭りは100ほどございますので、そのときに色々な船が入ってきます。グリコの看板がこれで、これが戎橋です。

これはタイガースが優勝したときに飛び込んだ川です。南警察の署長から4,200人が飛び込んだと聞きましたが、ここで4,200人が飛び込むのを警察がカウントしていたみたいですね。私が「上がって来た人は数えましたか？」と聞くと、「それを忘れていました。」と言っていました。怖い話ですね。



淀川の砂を使った遊び(中之島公園)

これは中之島公園に、色々なNPOの方が淀川のビーチバレーで使った砂を置いておいて、砂遊びが出来るようにしているもので、子どもたちがたくさん遊びに来ました。



市民による川の清掃活動

これはカヌーとかあらゆるものを使った川の清掃活動です。

ここは東横堀川の閘門です。ここにみんな集まってスタートしましょうということで、約100人が集まっています。



市民の手づくりによる新しいイベントとして平成の七夕まつり(大阪の川を天の川に)

「平成OSAKA天の川伝説2009」

これは今年の七夕の日に、日本で一番長い商店街である天神橋筋商店街を中心に行ったイベントです。

ここは大阪天満宮の近くで、この辺の町内会や企業、市民もみんなで大阪の川を天の川にしてみようと、LEDの球を2万個も流しました。ここは先ほどの八軒家浜の浮き棧橋です。

とりあえず社会実験として一回やってみようということで、100人委員会という組織を作りまして、市民の手で作った新しい形のお祭りです。

大阪では色々な祭りなども、1度試してみようということでやっています。



市民の手によるクリスマスボート

これはクリスマスのおきです。色々な船がクリスマスにトナカイを付けてやってきます。

そして、お客さんを乗せて中之島の川をサンタの船長さんが案内します。



クリスマスでにぎわう中之島

これもクリスマスのおきの中之島公園です。天神祭で使った船を今度はイルミネーションヨットにするなど、色々なことをやっています。

ご静聴ありがとうございました。

最後に、7月7日の日にした七夕祭りの映像を、3分ほどですが、それを見ていただいて終わりたいと思います。

(平成 OSAKA 天の川伝説の DVD 上映)

ご静聴ありがとうございました。

事例報告3

いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。

柳川市総務部企画課 係長 山田 秀太 氏

1991年に柳川市役所入庁。「柳川市掘割を守り育てる条例」の制定や「柳川市掘割を生かしたまちづくり行動計画」の策定に携わる。計画に掲げた「新たな水まつりの創造」のため、2008年度には、実行委員会方式による「水郷柳川夏の水まつりスイ！水！すい！」を企画。2009年8月には第2回水まつりの企画・運営に関わる。

全国水の郷サミット 事例発表資料

いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。
～水郷柳川夏の水まつりスイ！水！すい！～



平成21年10月15日(木)
福岡県柳川市総務部企画課



きたいと思います。

スイ！水！すい！というのは、私たち柳川の方言でして、例えば「野球しよう。」というときに「野球すい。」という使い方をします。

第1部
柳川市の概要



■本日の大まかな流れ

■第1部 柳川市の概要

■第2部 柳川市の掘割

■第3部 いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。
～水郷柳川夏の水まつりスイ！水！すい！～

みなさんこんにちは。福岡県の柳川市から参りました、山田と申します。

今日は、「いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。」ということで、水郷柳川夏の水まつりスイ！水！すい！を事例に発表させていただ



平成17年3月21日に、旧柳川市、大和町、三橋町が合併して誕生。

福岡市や熊本市まで約50km。
佐賀市まで約15km

JRで博多から1時間、熊本から75分。
西鉄電車で福岡天神から45分。
福岡空港から80分。
佐賀空港から30分。
車で福岡IC・熊本ICから約1時間。
佐賀市から約30分。

「坂東太郎」(利根川)・「筑紫次郎」(筑後川)・「四国三郎」(吉野川)と言われる筑後川の河口と有明海に面する干拓地帯。

福岡県南部の筑後平野の西南端に位置し、東西11km、南北12km、総面積76.90km²の田園都市

■人口 平成21年8月末72,981人
合併時76,312人から3,331人減少(1月あたり約64人減少)

まず、柳川の概要について説明させていただきます。

柳川は、平成 17 年の 3 月 21 日に、旧 1 市 2 町が合併して誕生しました。位置的には、福岡市とか熊本市から約 50 k m、隣の佐賀市から 15 k m ぐらいの位置にあります。

利根川、吉野川と並んで、暴れ川と呼ばれております筑後川の河口と、有明海に面する干拓地帯です。面積的には縦横に約 11、12 k m で、76.9 km²の田園都市です。

人口は 8 月に 73,000 人をきったということで、1 月当たり 64 人ぐらい人口が減っている、また、少子高齢化が進んでいる市です。



■水の郷百選
柳川市のポイント

- 総延長約 930km に及ぶ掘割が生活と密着
- 市民と行政の共同作業による浄化活動
- 川舟による川下りが観光名所となった水郷の町
- 北原白秋が生誕したふるさと

水の郷百選とは・・・

水環境保全の重要性について広く国民に PPR し、水を守り、水を活かした地域づくりを推進するため、平成 7 年、平成 8 年に、107 地域を「水の郷百選」として国土交通省が認定。

水の郷百選ということで本日ご縁をいただきましたが、こちらにつきましては、徳島市さんと一緒に選んでいただいております。



■日本の道百選
水辺の散歩道

袋小路から筑兵衛門橋まで川下り内堀コース沿いに整備された散歩道は、昭和 61 (1986) 年に国土交通省の「日本の道百選」に選ばれました。

道中には柳城児童公園や水郷柳川の基礎を作った田中吉政の像、詩聖・北原白秋の歌碑などもあり、掘割沿いの静かな散歩道として親しまれています。

日本の道百選とは・・・

1986年に、道の日の制定を記念して国土交通省と実行委員会により制定された、日本の特色ある優れた道路104本を選定。

■夢色に・・・
都市景観百選 平成5年10月 国土交通省
かおり風情百選 平成13年11月 環境大臣
緑水百選 平成18年2月 農林水産大臣

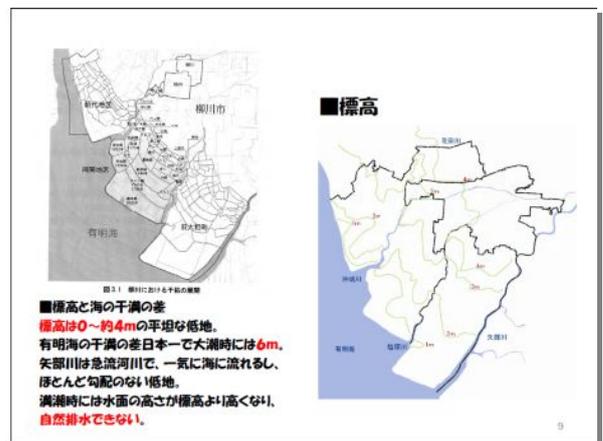
また、徳島市さんもですが、日本の道百選ということで、国土交通省さんに川下りコース沿いにある散歩道を選んでいただいております。



まず、柳川市の掘割についてということで、こちらに航空写真を付けさせていただいております。ご覧のとおりこれが沖の端川で、このように干拓地です。



柳川の幕開けということで、少し分かりにくいかもかもしれませんが、グリーンの線が縄文時代の海岸で、ピンクの線が弥生時代の海岸線ということです。左の図にありますとおり、干拓の歴史でまちが生まれてきたところです。

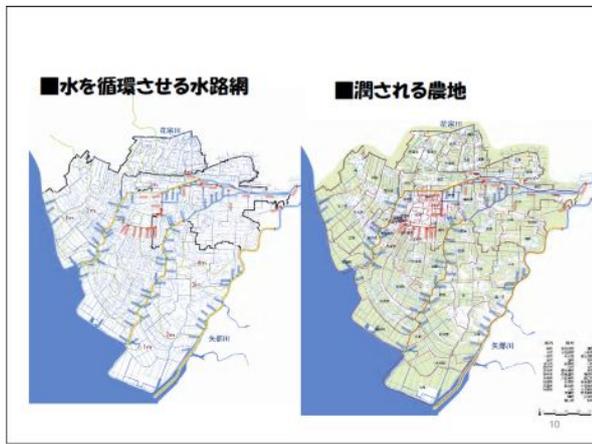


事例報告3 「いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。」

先ほどの氏原さんのお話で、干満差が4mということで、有明海に次いで大きいということをおっしゃっていただきましたが、有明海の場合は6mの干満差があります。

標高をご覧頂くと、海拔0mから4mということで、満潮時には海面よりもまちの高さが低くなります。

また、主に水源をいただいている矢部川は急流河川ですので、一気に海まで流れていってしまいます。そして、なおかつ勾配がない低地ですので、掘割を掘ることによって、昔の方々は地域の田んぼや掘割に水をもたせていたという治水と利水の歴史があります。



このように、河川から引いてきた水を、縦横に巡っている掘割を通して農地を潤しているまちです。

■はじめに「昔」って？

30年×70世代前=2,100年前・弥生時代中期
30年×30世代前=900年前・平安時代後期
30年×15世代前=450年前・戦国時代
30年×5世代前=150年前・幕末

■約2,000年前・・・柳川の陸地化、人が住み始める。
■約400年前・・・江戸期から掘割の整備始まる。

・整備された道路や掘割は現在も活用。
 ・掘割は第二次大戦前後まで生活用水として市民生活に欠かせない存在。現在も、農村部では農業用水路として重要な役割。

昔ということで、先ほど弥生時代の話をしました。2千年ぐらい前から柳川の歴史が始まって人が住み始めました。

そして、約400年前、江戸期ぐらいから掘割の整備が始まりまして、第二次世界大戦の後ぐらいまでは飲み水や炊事洗濯といったことに使われていました。

現在も、農業用水路ということで農業の基盤になっているところなんです。



水は生業を支える基盤ということで、水源の森から筑後川と矢部川に流れてきた水が、掘割を巡っています。

そして、この水は農業の生産基盤になります。また、掘割を通った水が有明海に流れ出ていますが、本市は佐賀県と福岡県に面する有明海、この海苔の生産高が日本一ということで、水は、この海苔の生産、あるいは魚貝類という水産業の生産の基盤にもなっています。

柳川市の場合は、農業、水産業の加工品を扱う皆さんが第二次産業につかれています。大きな特徴ですので、市民の皆さんの生業を支えているのが水といっても過言ではありません。

掘割の歴史的背景

■掘割の役割
 治水 定住域の開発
 利水 農業・生活用水路

■江戸時代初頭(400年前)の掘割整備
 古代～中世に整備された条里制の水路を改造して市街地の掘割整備
 ・柳川城整備
 ・農業基盤整備

↓

現在の水路網の原型
 農業用水、洪水防止、貯水、保水、地下水涵養 など

昭和16年頃の外堀(約70年前)

次に歴史的な背景ということで、先ほど申したとおり、江戸時代の初頭に掘割が整備されております。これは古くは条里制のころに遡って、これらを基に掘られたとお聞きしています。

現在も、農業用水路、洪水の防止、貯水、保水、地下水涵養ということで、面全体でダムの役割をしているとよく言われます。



そして、これが江戸時代と現代の掘割の図面を比較したものです。

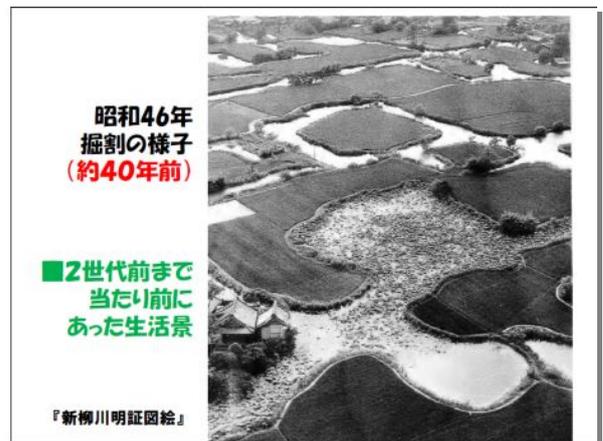
埋められているところもありますが、幅は狭くなっているものの、青やピンクの部分は江戸時代の掘割の姿を残しています。



これは昭和 16 年ぐらいの写真だそうですが、たかだか 70 年ぐらい前にはこういった水際の生活風景がありました。



こちらの写真は昭和 40 年ぐらい、約 45 年前ということで、私たちのおやじ、おふくろの世代のころですが、その当時はこういった農作業をされていました。



こちらの写真は昭和 46 年ごろのものですが、一世代、二世代前までは、当たり前にあった生活風景です。



事例報告3 「いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。」

柳川の「水」からみえてくるもの
掘割の延長:930km 市道の延長:988km

- ・自然、風土
- ・積み重ねてきた歴史
- ・人々の暮らし

柳川の「水」から見えてくるものということで、自然、風土、歴史、暮らしなど、水と市民の生活の関わりが非常に深いです。

柳川の「水」の特徴

- 共通性 水と生活との関わりが深い
- 固有性 地域ごとに固有の生活がある
- これらが全て水系で繋がっている

地域ごとというのは、冒頭に合併して新市になったとお話しましたが、上流域と干拓地、市街地、そういった地域ごとに生活スタイルがあります。

これらがすべて掘割の水でつながっているということが、本市の特長かと思えます。

水郷柳河こそは、我が生まれの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母体である。この水の構図この地相にして、はじめて我が体は生じ、我が風は成った。

近代日本の詩聖・北原白秋が死の前に著した「水の構図」の一節です。(昭和17年)

北原白秋先生が亡くなる直前に「水の構図」というものを出されています。

この中で「水郷柳河こそは、我が生まれの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母体である。この水の構図、この地相にして、はじめて我が体は生じ、我が風は成った。」ということを書き添えていただいております。

第3部
いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。
水郷柳川夏の水まつり スイ！水！すい！

近年掘割の環境が...

■昭和40年代～(約45年前～)
 ・水質の悪化

- 上水道の発達
- ビニールハウスの出現
- 洗濯機と合成洗剤
- し尿浄化槽
- ごみの不法投棄...etc

■昭和50年代以降(約35年前～)
 ・掘割の再生へ

河川浄化事業

- 掘割の整備
- 掘割の湛滞
- 水路清掃活動
- 維持管理

そして、実際の水まつりの話ですが、先ほどもお話をしたとおり、高度成長期には上水道の発達、洗濯機と合成洗剤の普及、ごみの不法投棄といったことが続きまして、左下のような状況になってしまいました。



このままではいけないということで、住民説明会を開いています。この頃は、堀は埋めてしまえという市民の皆さんからの意見が大半で、1回の会議で堀をきれいにしましょうということにはなかなかならなかったそうです。



説明会を開いて理解を得たところから、人力やバキュームダンパー、ジェットポンプなどを使って、市民の皆さんと市の職員総出で浚渫をしたり掃除をしたりということを始めました。



そういった活動の成果がありまして、少しずつ状況は改善されてきました。



水に関する取組では、色々な市民の皆さんと協働という形で取り組んできています。

特に、昭和 51 年に用排水路管理条例の制定、昭和 52 年に河川浄化計画が策定され、市民の皆さんと一緒に、浚渫や掃除をしていく取組が始まったということです。

事例報告3 「いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。」

- 昭和62年(23年前) スタジオジブリ「柳川掘割物語」製作
監督・高畑勲氏、製作・宮崎駿氏、実写映画。
- 平成2年(19年前) 小型合併処理浄化槽設置補助金
- 平成3年(18年前) あめんぼシティ推進計画
第3次MPの「水の軸」補完計画、柳川らしいふるさとづくり
「掘割を基軸とした、豊かで調いのあるまちづくり」
- 平成5年(16年前) 公共下水道事業開始
- 平成6年(15年前) 柳川あめんぼセンター開館
市立図書館に水の資料館と親水公園の複合文化施設
- 平成7年(14年前) 「水の郷百選」として国土交通省から認定
- 平成8年(13年前) 掘割を舞台に「柳川ソーラーボート大会」開催
- 平成11年(10年前) 柳川市掘割を守り育てる条例(愛称:水の憲法)制定
劇読本製作、掘割清掃(掘割の日)、掘割あめんぼ隊開催
- 平成13年(8年前) 第4次柳川市総合計画策定
「柳川市掘割を生かしたまちづくり事業計画」と合冊
- 平成16年(5年前) 柳川市建築指導条例
- 平成17年(4年前) 旧1市2町合併 条例は暫定施行(旧柳川市区)

今回のイベントにつきまして、その基礎となりました「掘割を守り育てる条例」という条例を平成11年に定めています。

愛称を「水の憲法」と付けさせていただいております、こういった取組の中から、市民の皆さんと一緒に始めたということです。

- 平成19年(2年前) 「第1次柳川市総合計画」を策定
5つの重点プロジェクト設定、「自然との共生プロジェクト」
- 平成19年(2年前) 新市全域対象に「柳川市掘割を守り育てる条例」施行
- 平成19年(2年前) 景観行政団体
- 平成20年(1年前) 「掘割を生かしたまちづくり行動計画」策定
平成20年度からの5ヵ年計画
・将来構想「ホテルの飛び交う水郷柳川」。
・3つの柱 ①水環境の保全 ②水郷景観の継承 ③掘割を守り育てる実践行動

今回の水まつりは、この「掘割を生かしたまちづくり行動計画」の企画事業の一つです。

この行動計画の柱である、いかにして実践するかという中で、新たな水まつりをつくろうじゃないかという話になりました。

- 平成20年(1年前) 新たな水のみつりの企画
社の一つ「掘割を守り育てる実践行動」に掲げる事業
第1回「水郷柳川夏の水まつり スイ!水!すい!」開催
第13回目となる「柳川ソーラーボート大会」同時開催
- 平成20年4月24日 掘割を生かしたまちづくり審議会委員有志で準備会開催
■4人の委員の皆さんと意見交換、趣意書づくり。
- この後、趣意書をもって協力していただける方にアタック
行動計画に掲げる事業として、市民が水と親しみ、水と掘割を通して環境問題を考え、郷土の地域資源である掘割や河川を活用した「新しい水のみつり」を創造しようと取り組むものです。

平成8年から、柳川では掘割の中でソーラーボート大会をやっている、これと何かタイアップしてできないかということで、この行動計画の策定に携わっていただいた審議会の委員さんの有志の方4人と趣意書を作ったところからスタートしています。この趣意書を作ってアタックし始めたということです。

第1次柳川市総合計画 5つの重点プロジェクト

- 市民との協働プロジェクト
～市民力が元気の源～
- 安心して生活できるまちづくりプロジェクト
～安全と安心が元気の源～
- 柳川ブランド化プロジェクト
～地域力が元気の源～
- 住みよいまちづくりプロジェクト
～住みよさが元気の源～
- 自然との共生プロジェクト
～共生が元気の源～

■まちづくりは市民の生活改善運動

■わたしたちの方針
《物語》 《共働プロセス》

起	共有
承	共感
転	共働
結	共創

■「起」は「共有」であり、平たく言えば「お互いを知り合う」こと。
■お互いを知り合う中で「共通項」が見つかれば、「共感」が生まれる(承)

情報を出せば出すほど味方が増える。
情報を聞けば聞けば味方が増える。

私たちが色々と事業をする中で、市民や事業所の皆さんと協働するにあたり、一番心がけていることは情報の共有です。

■柳川の人には、もっと柳川を楽しむ権利がある。

■このプロジェクトのもう一つの狙い
「官民の意思決定レベルでの共働の標準化」

「市民協働」を、行政が考えた企画を官民で実施するという「実施の段階での協働」ではなくて、「企画書段階からの市民参画」の良い事例にしたい思い。

まちづくりに市民と行政は敵同士ではない。
共通の敵は「無関心」である。
まちに対する関心度を増やすことが、まちづくりの推進につながる。

■市民活動の意思決定基準は自発性。平たく言えば「勝手にかれん」気持ち。

SUI/SUI/SUI/2009  35

ですから今回も、行政が企画を立てて、市民の皆さんにやりましょうというのではなく、白紙の企画書の段階から、何かやりましょう、何かやれませんか、というような話をしながら、今回の企画を立てたところです。

これまでのまちづくり 「ものづくり」
これからのまちづくり 「ものがたりづくり」

まちの未来にむけてどういったストーリーを描けるかが大事。

■柳川の強味は「掘割」 弱味は「川が汚い」。
市民の日々の暮らしと「水」「観光」が離れてしまっている。

■「集める」から「集まる」仕掛け

無理に作りこんで「人を集める」のではなく、ありのままの姿に光を当てて「人が集まる」ように仕掛ける。

■あるもの探し

まちづくりは「ないものおだり」ではなく「あるもの探し」が大事。

■このため事務局として心掛けていること…

- ・「目に見えない水先案内人」に徹すること。
- ・信じて待つこと、性善論に立つ。
- ・市民との共働は、仕事の「オプション」でなく「標準装備」。
- ・段取りだけで考えない。

SUI/SUI/SUI/2009  36

■白紙の企画書からのスタート

■水郷柳川の水の祭典実行委員会会報から ～目的～
第2条 実行委員会は、～中略～市民の手による水環境の再生と本市が恩恵を受ける水源の森の重要性を啓発することを目的とする。

市民の力と地域の力を調に、本市の地域資源である掘割や河川を活用し、次代を担う人づくりや市民主導の地域づくりを推進するため、市民自らアイデアを出し合い、事業を企画し、手作りで水と親しみ、参加できる「市民の市民による市民のための水まつり」を実践する。

市民の手による水環境の再生と本市が恩恵を受ける**水源の森の重要性**を啓発することが目的。

また、**ソーラーボート大会との連携**
環境面における本市の先進的な取り組みを全国に発信して本市のイメージアップを図る。

SUI/SUI/SUI/2009  37

この中からキーワードが出てきました。それが、自分たち「市民の市民による市民のための水まつり」にしようということでした。

それから、先ほども申しあげましたとおり、水は私たち市民の生業のもとになっていますので、その大本であります水源の森の重要性を啓発していこう、それから、ソーラーボート大会と連携していこうということで、会則や目的といったものはすべて、実行委員の皆さん、市民の皆さんが作られました。

**水郷柳川夏の水まつり スイ！水！スイ！
イベントコンセプト**

人が集う 心が通う 水辺の創造

①水環境の保全、②水郷景観の継承、③掘割を守り育てる実践行動を主体とした「掘割を生かしたまちづくり行動計画」の一環として恒久的に持続可能なポジショニングを目指す。

水辺回帰に向けた方向性の策定

水と遊ぶ 水辺で寛ぐ 水辺を感じる

SUI/SUI/SUI/2009  38

このイベントコンセプトも、水辺回帰に向けた方向性を作っていこうというキーワードも、実行委員の方からいただいた言葉です。

水と遊ぶ

水辺で遊び、水に親しみ体験型のイベントを創造し、柳川が持つ水辺のロケーションの豊かさを感ずる仕組みづくりの創造。





SUI/SUI/SUI/2009  39

1つ目のコンセプトは、「水と遊ぶ」ということです。

掘割の上で、カヌーや本市の川下りに使われていますどんこ舟をオールで漕ぐ、船頭レースや掘割エイト競漕といったものをやりました。

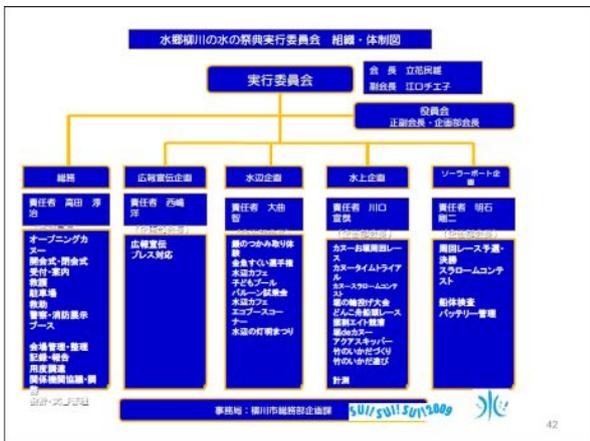
事例報告3 「いのちの水にありがとう。水源の森を大切に。」



2つ目のコンセプトとしては、「水辺で寛ぐ」ということで、子どもたちやお年寄りが参加しやすいイベントをつくることです。



3つ目は、「水辺を感じる」ということで、上流から竹を切ってきて、どんこ舟の上に浮かべて灯明まつりをやるという企画を、市民の皆さんと一緒にやりました。



去年から始めて、今年がまだ第2回目です。我々がいつも話しているのは、1年間365日のうち2日間のイベントではなく、陣内先生のお話にも出ていましたけれども、暮らしの中に当たり前に水辺があるということ、こうしたイベントを通して感じるきっかけになっていけばいいなと考えています。

長〜く続けていくためには… 皆さんの意見から

- 活動が楽しい、おもしろい。
- テーマがしっかりしていて、そのテーマに興味がある。
- 達成感が得られる。
- 面倒くさくない。
- 参加しやすい（時間帯、場所など）。
- 素敵な人がいる。

SUI/SUI/SUI/SUI/SUI 46

本日はご縁をいただき
ありがとうございました。

お付き合いいただき
ありがとうございました。

SUI/SUI/SUI/SUI/SUI 48

それから、長く取り組んでいくためにはどうすればいいのかという話をしていましたら、市民の皆さんからは、楽しい、テーマに興味がある、達成感が得られる、面倒くさくない、参加しやすい、素敵な人がいるといったことがあると、自分はずっと活動を続けていけるのではないだろうかというお話をいただきました。

いのちの水にありがとう。
水源の森を大切に。

いろいろなアプローチがあってよいし、それが楽しい。

SUI/SUI/SUI/SUI/SUI 47

とにかく私たちは、水源の森から水をいただいて、有明海にきれいな状態で水を返していくということで、その重要性を啓発していきたいと考えています。

これからも、水源の森の大切さをPRしていきたいと考えています。以上です。

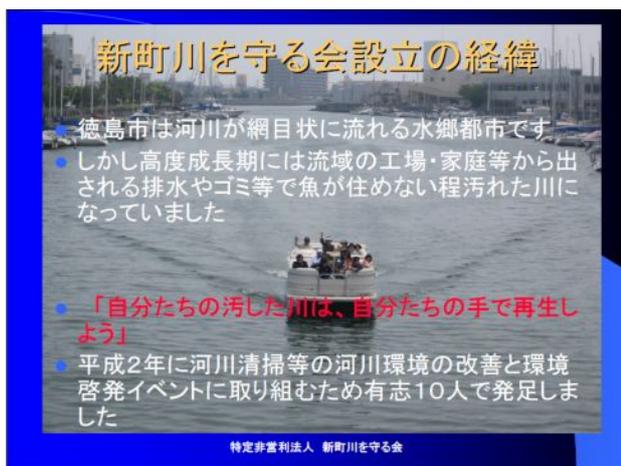
ありがとうございました。

事例報告4

川を生かしたまちづくり

NPO 法人新町川を守る会 理事長 中村 英雄 氏

1990年2月に有志10人と「新町川を守る会」を結成。1999年にNPO法人格を取得。ひょうたん島周遊船の名物案内人として活躍するほか、川の清掃やイベントの開催、花植え、植樹活動など、広範囲に活動。「一人の百歩より百人の一步を！」を合言葉に、川を守り、水を生かしたまちづくりを推進している。



新町川を守る会の中村です。

できる人が・できる時に・できることをということで、平成2年の3月に新町川を守る会を立ち上げまして、この20年間、ずっと川での色んなことをやっております。

徳島市は非常に川が多くて、138の川が流れています。

川の汚れの原因は、かつては工場排水が中心でしたが、今では家庭の雑排水が7割を占めています。自分たちが汚した川は、自分たちで掃除しようということで活動しています。

会員は、最初は10名で始めましたが、今は300名ぐらいに増えています。個人が280名で、法人が20社。

会費は個人が3,000円で、法人が30,000円ということで、会費を払うと、掃除をする権利を皆さんに与えております。



新町川の位置は、なかなか全国に行っても徳島といっても分かってもらえないので、このような地図をつくっております。



主に活動しているのが、このひょうたん島です。

ちょうどこの会場の前を流れているのが助任川で、助任川とこの新町川に囲まれたところ、1周6kmありますが、ここで色々な活動をしています。活動拠点は、両国橋のところに構えております。



河川清掃を、毎月1日と第3土曜日にしておりますが、最近は掃除が好きな人もいますので毎週1回ぐらいのペースでしています。

今はこのように自転車はありませんが、夏場は掃除をすると4トンぐらいのゴミが出ます。

発泡スチロールや空き缶、タバコの吸殻もたくさんありますし、時には犬や猫、さらには豚などの動物が浮いていることもあります。

大きいものであれば冷蔵庫だとか、生活に必要なものなら何でもあるような気がします。



新町川の掃除は初めからずっとしていますが、新町川だけではいけないということで、吉野川にも毎月1回、清掃に行っております。

ちょうど10年ぐらい前から行くようにしていますが、やはり吉野川の方にもたくさんゴミがあります。台風が来ますと、上流から流れてきたゴミで一杯になります。

これは吉野川の河口のところですが、取りきれないぐらいのゴミがたくさんあります。



これは会場前の助任川ですが、私たちは、こうした船4隻で掃除をしています。

このときは助任小学校の子が船に乗りましたが、この4隻を使って、1周6kmを無料で運航しています。保険代は100円いただいておりますが、100円だと市民もたくさん乗ってくれますし、川も本当に良くなっていきます。

この周囲6kmの間、ほとんどの護岸が青石で整備されておまして、この前を通りますと、幼稚園の子が必ず手を振ってくれます。



両国橋のところには、こうした車椅子で乗れる専用のエレベーターがついていますが、やはり川は、だれでもが利用できるようにした方がいいと思います。

車椅子の人が、エレベーターに乗ってやってきました。やはり色々な人、だれでもが利用できるような川、そういう川づくりでなければいけないのではないかと思います。

このエレベーターが出来てから7、8年になると思いますが、年に大体 300 人ぐらいの人が利用しています。

ここだけではなくて、色々なところに行くときにもこういうエレベーターがあって、車椅子の人が降りられるようなまち、そういうまちづくりができていくと、徳島はますます魅力的なまちになっていくのではないかと思います。



それから、こういう川岸の花の手入れなどもしています。



これは、ひょうたん島を少し入ったところですが、これも平成2年5月から毎週日曜日、大体朝6時ぐらいから手入れをしています。

延長で400mぐらいありますが、こういうところに花を植えて、ずっと手入れしています。

夏場は草を抜くのと水やりが大変で、国道でも草花が枯れているように、やはり雨が降らなければ大変です。

でも、今のところ4、5人ですが、必ずみんなが行って手入れしています。

ここには見えませんが、桜の木も植わっています。本当は、こんなところに桜の木を植えてはいけませんけれども。



川では、ものすごく楽しむことをたくさんしています。

これはラブリバーイベントとして、水際コンサートを毎月最終金曜日に開いているもので、活動拠点としているところで、こういうライブをやっています。

この前に台船が浮かんでいて、100人ぐらい来ます。表現がおかしくていつも怒られますが、飲み放題 1000円です。飲み放題というといけないみたいですが、一応 1000円で、毎月最終の金曜日にやっています。

今月は 10 月 30 日ですが、非常に楽しくやっております。

みんなが川で遊び、川をきれいにしていくには、掃除をするということと、常に楽しんでいくことが大切だと思います。



これは、川での寒中水泳大会です。

昭和 30 年ぐらいまでは、徳島でも県庁前でした。その後は川が汚れて中止されていましたが、40 年ぶりに復活しまして、今年で 13 回目か 14 回目になります。この寒中水泳大会も毎年やっています。

今日のようなシンポジウムと違いまして、寒中水泳大会は、予定が 1 時間であれば 40 分で終わります。この事例報告も 1 時間で終わるはずでしたが、私のところですので 1 時間を過ぎていきますので。

こういうシンポジウムは延びるものですが、寒中水泳だけはもっと泳げと言っても、みんなすぐに上がってきます。

ただ、こうやって川で泳ぐということができるようになってきて、みんなが川に関心を持ってくれたのではないかと思います。



新町川をきれいにするためには、やはり吉野川でも何かしなければいけないということで、これは元々、徳島市の市制 100 年を記念して始まったイベントです。

今は新町川を守る会で、吉野川フェスティバルをやっています。7 月の最終の金、土、日曜日にやっていますが、3 日間で 5 万人ぐらいの人が来て、川風に吹かれて楽しんでおります。

川の中では干潟の観察会とか、ウインドサーフィンとか、川を主人公にしたようなイベントをたくさんしています。



これは阿波おどりのときですが、こういう水上ステージを作って、船で回っています。

この新町川の遊覧船は平成 5 年から始めまして、当時は 1 年間に 100 人ぐらいしか乗りませんでした。今年、5 万人ぐらい乗るのではないかと思います。

今年の 8 月 14 日の阿波おどりのときには、朝 10 時から夜 10 時まで運航しまして、1,980 人が

事例報告4 「川を生かしたまちづくり」

乗船しました。8月の乗船者数は10,560人を記録しまして、1ヶ月で1万人を超えました。



中秋の名月には雅楽の演奏会をします。今年は、10月3日にこういう演奏会をしました。

とにかく川を見てくれということで、みんなに川を見てもらうようにしています。

やはり女優さんも川も同じで、見られて美しくなっていきます。みんなに川を見てもらうことによって、川はきれいになっていきます。

まちも、川がきれいになっていくと、周辺の建物も川のほうに向いてきます。かつて川を背にしていた建物も、今は川の方に向くようになってきました。



これは川からサンタがやってくるというイベントで、大阪でも伴さんにぜひやって欲しいと思いますが、これも10数年してきて、毎年12月23、24、25日に高校生がこういう飾り付けをしてくれまして、船に乗ってサンタクロースが1日に1,000個ぐらいのプレゼントを配って

回ります。

最初は私もサンタクロースをしていましたが、去年は乗りませんでした。最近はなり手が多くて、中学生が2、3名、高校生が3名、大学生が2名、大人が1名か2名乗るようにしています。

川からプレゼントを投げていきますが、大勢の人が川沿いにきます。これだけ見るときれいです。後ろから必ず黒子がついてきておりまして、川の中に落ちたプレゼントは拾うようにしています。



徳島の川も、昭和40年から50年が一番汚れていたと思います。

そのときであれば、カヌーに乗ってもしぶきがかかるとボートが黒くなっていましたが、今はそんなに汚れないと思います。

カヌーも2日に1回の割合で来るようになっていて、カヌーを見かけるのが当たり前になりました。こんなにたくさん来る時は少ないですが、1艇か2艇は必ず来ています。



これは、青年会議所が企画しました、橋の下美術館という取組です。橋の下に絵を描いて、船から見るとい取組で、これも3年前だったと思いますが大変好評でした。



川がきれいになって、水辺が楽しくなってきましたので、こういう形で水辺にパラソルショップができました。

平成7年から始まって、最初はたくさん店が出ていました。しばらく出店数が減っていましたが、最近はまだ増えてきています。この前の連休も、たくさんのショップが出ていました。

昔は商店街が良くて、周辺にこういうものができていましたが、これからは川が良くなって、それから川岸が良くなって、それから商店街が良くなっていくという形で、川からの都市再生という流れに地域が大きく変わってくるのではないかと考えています。



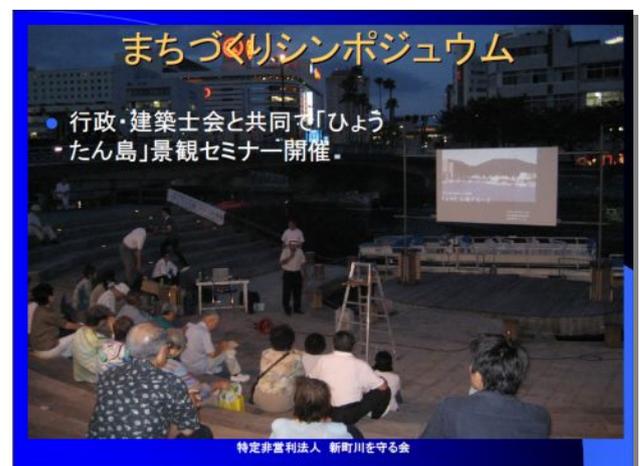
川のところでは、こういう遊山箱づくりなどもしています。



それから12月になりますと、県庁前のヨットハーバーにはこういうクリスマスツリーができて、私たちが活動している水際にも、下のようなクリスマスツリーが登場します。



また、水辺のパーティーですが、私も50歳ぐらいまではあまりお酒を飲みませんでした。今は飲まない日がないぐらいで、家内にちょっと飲むのやめたらと言われていますが、やめられなくて、毎日飲むようになっています。



事例報告4 「川を生かしたまちづくり」

色んな生態系や新町川を考えるようなシンポジウムもたくさん行われています。

川がみんなから見られるようになってきて、川の岸に色々な建物が建ったり、変わった色のものができたりしてきますので、みんなでこれからの新町川をどうしていけばよいかということについて話し合っています。



これが私たちの船着場ですが、NPOでこんなところの台船が許可されているところは珍しいのではないかと思います。

昨年、ここで建築士会の全国大会があったときに、水際公園全部を使って3,000人という大勢の人が川をみながらの懇親会をしました。

今月の10日にも、200名ぐらいで交流会をしましたが、こうやって常に川を見てもらいながら色々なことをやるようにしています。



川をきれいにしていくには源流から始めなくてはならないということで、最近が高知県の大川村まで行っています。今月も水資源機構さ

んと一緒に、山のほうへ行きます。

そして、源流での植樹や間伐、下草刈りをしていますが、そのときに山の人と一緒に話し合うことをしています。

下流は上流の恩恵をものすごく受けていますので、私たち下流のものが上流のために、何ができるのかということと一緒に考えるようにしていて、10年ほど前から年に3回ぐらい行くようにしています。今月も行きますので、よければだれでも参加してください。



こういう風に杉の間伐して、その間に木を植えてということをしています。

高知県では、森が非常に病んでいます。緑はたくさんありますが、下には下草が生えていなくて土が一杯です。緑はありますが、緑の砂漠という感じになっていて、雨が降ったら土砂がどンドンダムに流れて行きます。

これからは、下流のものと一緒に上流の森づくりをしていくことが本当に大切だと思います。



私たちは、ひょうたん島だけでなく、他にも色々なところに行っています。

2年前からは、鳴門まで船で行っています。ウチノ海まで往復 50km ぐらいありますが、これも保険代 100 円で行っていますので、だれでも参加してください。

明治 25 年から始まって昭和 10 年ぐらいまであった撫養航路ですけれども、陸上交通が普及してからは運航されなくなってしまいましたので、これを再興しています。行ってもらうと本当に楽しいところです。



吉野川を通過して、榎瀬江湖川に入っていきます。今日もこんな形で、朝に十六兵衛屋敷まで行ってきました。



ここを通過して今切川の河口堰まで行きます。

最終の日曜日は水資源機構さんが一緒に乗ってくれまして、河口堰の役割などの話もしてくれています。



これは去年の写真ですが、1km ぐらいに渡って、こういうホテイアオイというボタン浮草があったところで、読売新聞にも載りました。

今年はほとんどありませんが、去年は野菜畑を走っているようで楽しくなってきました、この上を船で走って行きました。

今年は台風もありましたし、国土交通省で最初から草を取り除いたと思いますので、今年はほとんどありません。

先週、川での福祉と教育の全国大会があったとき、ここまで東京の人や飛行機で来た人を迎えに行って、ここから徳島まで案内してまいりました。



船で行っていますのは、鳴門の朝市と徳島の朝市をつなぐためです。

徳島市でも紺屋町の朝市がはじまりましたので、鳴門の朝市と徳島の朝市を、船でつないでいます。鳴門は市役所の前と、第一土曜日がウチノ海でしています。

事例報告4 「川を生かしたまちづくり」

我々も台船の上で、その日取れた漁師さんの魚を売っています。毎週土曜日にやっておりますので、また覗いてみてください。

が、そういうことに先に投資をしていましたので、本当に徳島の人には、このひょうたん島に愛着と誇りができて、良いまちになっていると思います。



今後の展開として、色々なところ、十六兵衛屋敷や藍の館に行くことを考えています。

また、徳島市のひょうたん島だけでなく、北島町にもひょうたん島がありますので、来月には北島町のひょうたん島めぐりもします。

そうやって、色々なところの自治体と一緒に、地域づくりをやっているところです。

今の乗船者数は約5万人ぐらいですが、4割が県外、3割が市内、3割が郡部という形です。

自分たちのまちは自分たちがつくっていくという気持ちで市民が動いていくと、行政も、企業も、市民も応援してくれて、本当にきれいになってきました。

今ある4隻の船は、1隻は徳島市が、1隻はロータリークラブが、1隻は阿波銀行が、もう1隻はこの8月に港産業さんが寄附してくれたものです。船は大体500万円から700万円ぐらいかかります。

そうやって、市民みんなが応援してくれることで、まちは良くなっていくのではないかと思います。

ひょうたん島の周囲に整備されている青石の護岸と親水公園は、平成元年から平成16年ぐらいの間で、護岸に50億円、公園に100億円ぐらいかかったと聞いております。

今なら無駄な公共事業の代表かもしれません

住民の「ありがとう」がボランティアの配当

水辺を活かした様々なイベントは、川沿いの地域に人々の賑わいをもたらしており、遊覧船の乗客は4割が県外客が占め、観光客誘致にもつながるなど地域の経済活性化にも寄与しています

また自治体・各種団体からの視察も多数あります
川がきれいになりまちが活気付くのがわかることや
住民の方々の感謝の言葉が私たちボランティアの
喜びであり作業の配当と考えています

特定非営利法人 新町川を守る会

みなさんがありがとうといってくれる言葉が、本当に私たちの喜びで、みんなで頑張って地域づくりをしています。

どうもご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

水×人 — まちは、水ともっと仲良くなれる。 —

■コーディネーター	陣内 秀信 氏 / 法政大学デザイン工学部建築学科 教授
■パネラー	氏原 睦子 氏 / NPO法人雁木組 理事長
	伴 一郎 氏 / 伴ピーアール株式会社 代表取締役
	山田 秀太 氏 / 柳川市総務部企画課 係長
	中村 英雄 氏 / NPO法人新町川を守る会 理事長
	谷本 光司 氏 / 国土交通省土地・水資源局水資源部 部長

陣内 色々と苦労もある中で、それを見事に克服し、見事な成功を収めていらっしゃる4つの事例についてお話いただき、大変示唆に富んだポイントを示していただきました。

振り返って考えると、日本はどこのまちでも水を活用して水辺に親しむ都市空間をつくってきましたが、工場排水や下水など、近代化の色々な過程で水が汚れ、舟運が使われなくなってしまいました。そして、人々の意識は完全に水から離れてしまい、洪水からいかに生命と財産を守るかということだけに力が注がれてきました。

ところが、そういった状況を克服し、水辺を蘇らせてきたプロセスというのは、どこの地域にもあったということが、まずは分かっていたことだと思います。

私も水辺に関心があって、昔から色々なまちを眺めています。今日、お話をいただいた柳川は、水を生かしたまちづくりの代表選手として、70年代だったと思いますが、柳川と小樽の2つが日本の環境問題、都市問題の中で、水辺に最初に取り組んだ、戦って成功させた例だと思います。

小樽は、運河を埋めてしまうという話があったのを半分残して、それ故に大成功しました。

そして柳川は、宮崎駿さんの「柳川掘割物語」も制作されましたが、あの映画を私も30年近く

前に見て、非常に感動しました。

1度は埋めることとしていた掘割を、市民の方々が清掃する中で、水が生きているということを見出し、そして生かしたというプロセスがよく分かりました。大阪や広島でも、そうだったと思います。

始めに問題を少し整理してみますと、使われなくなって汚れてしまっていた水辺を取り戻す場づくりを、みなさんやられているのではないかと思います。柳川や徳島は清掃から始めたということですし、雁木タクシーを始めるに当たっても、やはり使われていなかった雁木を皆さんが掃除して、活動の場を取り戻したということで、その努力はすごかったと思います。大阪も市民が一緒になって、そういうことをやってらっしゃるということです。



ただ、それだけではだめで、やはり楽しく使う、親しむ、経験する、そういうことと一緒にしていく必要があります。

水辺をきれいにしながら、そこを使っていく創意工夫、アイデアたっぷりの色々な企画と、それを実行に移す行動力や組織力が必要だと思いますが、みなさん本当にどうやってこられたのでしょうか。

子どももお年寄りも、色々な立場の人が楽しんでる中で、段々と企業や行政も参加して下さったということですが、それまではご苦労もあったことと思います。

それからお金もかかります。大阪の天の川プロジェクトなんかは、相当お金がかかったのではないかと思いますし、他にも色々なことをするにはお金が必要です。

徳島に関しては、船も行政だけでなく、民間の銀行や企業やロータリーが寄贈して下さったという話ですが、皆さんが活動をしていく組織をどのように構成するか、そして、その時に企業や行政がどう関わり、サポートしていけるかというのは大きな問題だと思います。

それから、水辺を使わなくなって久しい一方で、河川管理者である行政が船着場などを管理するという体制が出来てしまいましたので、使おうとしてもなかなか自由に使えないといったことも多かったのではないかと思います。

それを克服している事例が多い訳ですが、広島と大阪は河川区域内に色々な施設やカフェをつくっているようです。

河川法が変わって、国や地方自治体の側にも、船着場などを積極的にNPO活動に提供するなど、本当にいいまちづくりをしていこうというご努力があったかとは思いますが、これまでの管理や規制をどのように突破してきたのかという背景もお伺いしたいと思います。

それから、会場の皆さんからご質問を3つほどいただいていますので、少しずつご紹介しますが、その中に関係するものとして「運航や花

壇整備の費用をどのように獲得されたのでしょうか。」という、費用の問題があります。

それから、「活動をする上で最大の問題点は何でしょうか、また、それに対してどのような対策をとられましたか。」ということで、これは広くご質問をいただいています。

市民で色々組織して、みんなが同じ目的を共有して活動していく中での障害もあるでしょうし、先ほど広島のシジミ漁の話がありましたように、元々水辺を利用されていた漁業者との関係もあるでしょうし、あるいは昔から屋形船やっている方々と新しい船を持ち出す場合のトラブルなども東京ではあります。

色々あるとは思いますが、まずご質問したいのは、清掃活動についてです。水の中に入ってドブさらいや掃除をするのは大変なことだと思いますが、よくそんなこと市民の皆さんを巻き込んでできたなと思います。

それを楽しさに結び付けていったポイントなどについて、柳川と徳島のお二人から聞かせていただけますか。

清掃から広がった地域の輪

山田 先ほどの資料では詳しく説明できませんでしたが、柳川の水質は昭和45年ごろが一番ひどくて、堀の上にゴミがたくさんあったり、水が流れなくなったりして、排水路的な使われ方しかしておりませんでした。その時に、やはり市民の皆さんと一緒にやっていくしかないということになったそうです。

宮崎駿監督の「柳川掘割物語」の中にもありますが、市が掘割を埋め立てるという計画を覆して、河川浄化計画の策定などを市民と一緒に始めて始めたということです。

住民説明会として、色々な地区に入って行政区長さんなどと話していくなかで、やはり当時はもう埋めてしまえという意見がほとんどだったそうです。今の私どもの課長と部長がその頃

の担当で、ずっと地元を説明して回ったそう
して、2、3回そういう説明会を開いても同意が
得られなかったそうです。それで、市の課長や
部長たちが自ら作業着を着て、まずは人力で始
めたそうです。

そして、やっと水が流れたのをきっかけに、
少しずつその地域の人たちの輪が広がっていっ
たということで、最初の取組は本当に小さなも
のだったそうです。

それが、ある程度にまでなると全市的な取組
になって、協力していただける方がかなり増え
てきたということだったそうです。

柳川市の水辺は、そういった形で昭和 52、53
年ごろから復活したといわれていますが、現状
はまだまだ徳島の川みたいにきれいではありません。
最下流に位置していて、清流といった水
にはまだまだですので、これからも色々な取組
が必要になってくると思います。

陣内 ありがとうございます。それでは続いて
中村さん、お願いします。

掃除する姿を格好良く

中村 平成 2 年に新町川を守る会を設立しまし
たので、会ができてからちょうど 20 年ぐらい経
ちます。私が掃除をしているのは、25 年ぐらい
になるかもしれません。

掃除は、この 20 年間で休んだことはほとんど
ありません。台風が来て土砂降りにならない限
りはほとんどしています。この 20 年間に 1 回か
2 回休んだだけではないかなと思いますが、掃除
は楽しくやっています。

陣内 掃除って楽しいのですか。

中村 掃除というのは汚いというイメージを持
たれがちですが、掃除をしている姿が板につい
てくると、段々とその姿がきれいに見えるよう

になってきます。

格好悪いものが格好良く見えるというのがフ
ァッションではないかと思います。

陣内 すごいですね。そうすると、掃除をする
人たちと水辺を使って楽しんでいる人たちは、
同じ人たちが両方やるという感覚ですね。

中村 そうですね。やはり掃除と楽しむことの
両方をします。掃除は、河川環境を良くして、
水を生かしたまちづくり、水辺に人が集まって
くるようなまちづくりをしていくための手段で
あって目的ではありませんので。

将来、こういうまちにしていきたいなと思
いながらやっていますので、15 名ぐらいが掃除に
参加していますが、みんなニコニコしているよ
うに私は思います。川の中に落ち込む人がいま
すが、中には落ち込んだまま掃除している人も
いますし、このごろでは企業もだいぶ掃除を
しています。

それから、みんなには「掃除をしているとき
に前でゴミを捨てる人がいても怒るな。黙々と
拾ってくれ。」と言っています。

やはり掃除する姿が格好良く見えなければい
けませんね。私がどう見えているか分かりませ
んが、自分なりに格好良いのではないかと思
っています。

陣内 なるほど。会員になると掃除をする権利
が与えられるというお話を聞いて、非常におも
しろいなと思いました。

うっかりしていましたが、このパネルディス
カッションの最初にやはり、今までの発表をお
聞きになった国土交通省水資源部長の谷本さん
から、印象や皆さんの活動をどのように捉えら
れたかといった、全体的なお話をいただければ
と思います。

壁を乗り越えるノウハウ

谷本 私ども水資源部の仕事と、今日のお話は直接リンクするところはあまりありませんが、私も以前、横浜市内で河川を管理する事務所の所長をしまして、その当時、川に関わる色々な市民グループの方とお付き合いをさせていただきました。そのときの経験もあって、今日の皆さん方の報告を、非常に感慨深く聞かせていただきました。

これは、私が勝手に思っていることかもしれませんが、最初はとにかく楽しければ物事は始まりますので、仲の良い人が集まって楽しいことをやる、バーベキューでも、魚釣りでも、祭りでも何でも構いませんが、まず始める。

そして友達の輪が広がって、段々と規模が大きくなっていくと好き勝手ができなくなって、ちょっとまとまって川の一角を使おうというときに川に関する規制や法律にぶつかる。それから、大規模にしようとするとお金もかかるし、大勢が集まると意見の違う人も出てくるといったことが、恐らく最初にぶつかる壁ではないかと思えます。

そして、ほとんどの活動はそこで終わっていると思いますが、今日、ここに来られている方というのは、それぞれ努力や苦勞をしてその壁を乗り越えた方々だと思えます。

特に河川の管理については、頭の固いことを言っていた時代が長く続きまして、今でもそういうことを言う人がたくさん残っていますから、ご苦勞されたのではないかと思います。

それを上手に乗り越えてこられたことが、それぞれの活動が本日まで、順調に継続されている理由だと思います。

そういったノウハウが実は一番大切で、これは水に関わることだけでなく、楽しくて仲間を募ってやろうとすることにすべて共通だと思います。最初にぶつかる壁を、どのように工夫して乗り越えたかというアイデアは、非常に大事

ですので、今日会場にお集まりの皆様も、ぜひこれから自分たちがやっという活動の参考にしていただければと思います。

それから、一つだけ付け加えさせていただきますが、堅い言葉では「規制緩和」と言いますが、最近は「社会実験」という言葉がよく使われています。

悪く言えば非常にルーズな使い方にもなっていますが、既成概念で今までできないと思っていたことを試しにやってみるということです。

例えば河川ですと、大きな堰から何百メートルの間は船着場を造ってはいけませんという規制がありますが、川の構造上、どうしてもそこに船着場が欲しいということなら、1年間だけ実験的につくってみて、何か不都合があればすぐに壊すという試みです。

そういう実験を10年ぐらい続けて何も不都合がなければ、川の規制の方が緩くなっていくという突破口も出てきていますので、これは頭の柔らかい人が2、3人いれば、たやすくできることのような気がして、これからの活動の枠を広げる良い手立てになるのではないかと思います。

陣内 ありがとうございます。今日、議論すべき一番重要な課題をずばっとお示しいただいて、本当にありがたいです。

そういう従来のルールを乗り越えていくための取組、社会実験という言葉が先ほど出ましたが、まさに広島や大阪でやってらっしゃることはその繰り返しというところがあると思えます。

雁木タクシーも、今までの常識では考えられないことにチャレンジされていて、規制やルールの中で格闘した、戦いの歴史だと先ほどおっしゃいましたよね。

同時に、頭の柔らかい人が2、3人いれば何とかなるということで、広島にも大阪にも頭の柔らかい知恵者というか、行動力のある人が、市

民の中にも行政の中にもいらっしゃるような気がします。

そういったお話を広島と大阪のお二人に伺いたいのですが。

壁を企画に変えていく

氏原 頭の柔らかい知恵者ももちろん必要ですが、やはり一人は負けず嫌いがいないと続かないかもしれませんね。

私たちがしていることは、当初、何をやっても、どこへ行っても新参者という扱いを受けました。それは覚悟しておりましたので、これを認めてもらうためには実績を作るしかないということから始まりました。

それは、行政の規制ももちろんのことですが、川に元々ある慣例的なものとか、まちの仕組みというものについても、やはり実績をつくって存在を認めてもらうところからのスタートだったと思います。

理不尽なことはたくさんありますが、それを壁と呼ぶか、企画と呼ぶかというのは大切だと思います。大変なことばかりあると仲間は離れていくこともありますので、仲間づくりというのが一番苦労しているところです。

川をテーマに雁木タクシーという人様の命を預かる船の事業を興していくのは、色々な考え方の人間がいて賛否両論ありますが、壁を企画に変えていく、歴史的な雁木を保存するプロジェクト、子どもたちのプロジェクト、環境のプロジェクト、食文化のプロジェクトという風に展開していくことで、壁をまず企画に変えることが大切だと思います。

それがイベントであれば、同時に仲間も広がっていきます。雁木組を名乗っている人の中には、実は船に全然関わったことがない人もいます。シジミの応援プロジェクトとして、シジミを用いたフランス料理の講習会を開いた人が仲間になってくれるなど、柔軟な形でやっていく

のが私たちのやり方かなと思っています。

とはいっても、すぐに仲間が増える訳ではなく、本当に信頼できる人というのは1年に2、3人というようなペースでやっています。

陣内 行政の中にも、徐々にそういうことを分かってくれる人が出てきていますか。

氏原 そうですね。行政の方は、仕事としては応援できないけれども、個人として関わってくるところからスタートしています。

それだけ、雁木を使って航路のないところで事業をするということには、かなり行政の方は構えていらっしゃるということが多かったですね。運輸局しかり、河川管理者しかり。

陣内 今はだいぶ良くなりましたか。

氏原 どうでしょう。

陣内 今のお話、大変おもしろく伺いましたが、壁を壁と感じるか、壁を企画に変えてプロジェクト化し、柔軟にアイデアを出していくことで大きく違うということです。

先ほどの掃除についても、格好良く見えるようにというお話を中村さんがされていて、やはりテーマというか、何をなすべきかということのを浮かび上がらせて、それをみんなでやりがいのあるものに仕立て上げる創造性というものの方が非常に大切だなと感じました。

それをプロジェクト、ワークショップという言葉もよく使うと思いますが、プロジェクトにするという方法もいいなと思っています。

そういう意味では、これまでに色々なプロジェクトを打ち上げて、それを見事に実行してこられた伴さんがいらっしゃいますので、ご苦労されたことも多かったと思いますが、社会実験という話もでしたので、そういったことも含めてお伺いしたいと思います。

みんなが立ち行くように

伴 大阪の場合は天神祭がありますので、川の掃除などにつきましても、天神祭のボランティアがそのまま掃除のボランティアになります。行政の方も民間の方も学生も色々な人が入って、7月24日、25日に500人が集まります。

そして、最高齢で80歳過ぎのおじいちゃんもボランティアで来ます。世の中のために何か良いことをしたいと行って来ますが、そのおじいちゃんのために、2人ボランティアがつかなければ危ないという感じです。

テーマについては、大学生もお年寄りもお子さんたちも行政も立ち行くように、「心のゴミを拾いましょう。」ということでやっています。ゴミを拾って心に溜まっているゴミも拾っていきましようと言うと、割とみんな素直に拾います。

そして、大阪商工会議所の会頭名で天神祭のボランティアに来ましたという証書を学生に渡す訳です。そうすると学生は必ず4年間来ます。就職に有利になるという話もありまして、楽しみながら現実的なことも含めて参加してくれています。

最初の2、3年は来たときに渡していましたが、ゴミ掃除をせずに証書もらったら帰ってしまう人もいたので、今は終わってから渡すようにしています。

それから水上タクシーについては、昔の話になりますが、東京の友達から「明日、水上タクシーに乗りたい。」と連絡がきたときに、大阪市の建設局に電話したら、2週間前に連絡してもらわなければいけないと言われました。

そして、本当に乗るかどうか東京の人に印鑑をもらってきてくれと言われましたので、「タクシー乗るのに印鑑もらってこいて？タクシーなんて今言って、今乗るものと違いますか。」と言いました。

すると、次は2週間前に鍵を取りに行ってくださいと言われて、大阪の南港にあるWTCと

いうところに行って申請書を出して、許可が下りたらまた鍵をもらいに行くわけです。

申請書をまず出しにいて、2、3日後に許可がおりたら鍵をもらいに行って、それで鍵を持って帰って栈橋の入口のドアを開けて、乗せて、終わったらまた鍵を返しに行く訳です。ですから、水上タクシーに1回乗ろうと思ったら、船長さんは4日間ぐらい仕事できません。

これではおかしいということで、色々話をしてきましたが、最終的にはもうNPOに任せなさいという話になりまして、川の駅にしろどこにしろ、八軒家浜も含めて、全部NPOが鍵を管理しますということにしました。

今は、NPO大阪水上安全協議会という組織をつくって、すべての鍵を私たちが管理しています。

それから、2年ほど前に大阪シティクルーズ推進協議会という組織をつくって、すべての大阪の舟運業者に登録してもらっています。観光船の業者も新規参入も関係なく参加してもらっています。

つい先週、大阪の川に全部の船が出て水上パレードをしたところでした。砂利採集船も川のゴミ掃除の船も水上バスも屋形船も全部出てパレードをしてもらって、そこに市民が来て拍手を送ってもらいました。船の横には横断幕をつけて、どこの会社の船ですよということをみんなに見てもらいました。

そうやって、みんなが立ち行くようになんとかしていくことが大切です。

壁があっても、いくらでも乗り越えられます。壁は一人のキャッチボールみたいなもので、力を入れるとこっちに返ってくるし、力を抜くと手前に落ちるということで、私たちも色々なものを乗り越えています。

色々と言っても大阪でありがたいのは、天神祭がありますので、少なくとも年に1回は150隻の船がみんな顔を合わせていますので、非常にやりやすいということです。

陣内 さりげなくおっしゃっていますけれども、驚くべきお話で、大阪の色々な立場の船が勢ぞろいして水上パレードをしたというのは、ちょっと信じがたいぐらいすごい話だと思います。

水上安全協議会のお話なども出ましたが、そういうすごいイベントや組織の言い出しっぺというのは、どういうプロセス、仕組みで実現できていくのですか。

伴 みんな思いつきを言っているだけで、そんなに真剣に考えていないと思いますよ。

ただ、普通は「血湧き、肉踊る」だったらそれで成功すると思いますが、大阪ではそれが通用しません。大阪の祭りや色々なものは、「血湧き、肉踊り、骨笑う」という、そこまでしないとなかなか皆さんついてきませんので、恐らく大阪人のDNAでしょうね。

天神祭もそうです。100万人以上が参加して、神さんに向かってカップヌードルやサントリー、モルツといった商品名を連呼する祭りは、世界中を探しても大阪だけだと思います。

陣内 伴さんと大阪のすごさというのが、みなさんにもお分かりになってきたと思いますが、やはりそういうノリがないと、みんなの中に受け継がれているDNAがないと、なかなかそこまでできないのではないかと思います。

中村さんにお聞きしますが、今では新町川を守る会の活動はこれだけ実績が評価されてくれば、中村さんが働きかければ企業も行政もお金も出してくれるかもしれないということになっていると思いますが、なかなかみんなをまとめてそこまですごいことやるというのは、そんなに簡単ではなかった訳ですよ。

市民参加ではなく行政参加へ

中村 今ではみんなが応援してくれます。本当に困るぐらい応援してくれます。

行政も企業も市民も応援してくれますが、やっぱり市民が応援してくれるということが大きいのではないかと思います。市民が応援してくれると、必ず行政も企業も、みんなが応援してくれるようになると思います。

それから、最初はお金もなかなか大変ですけども、行政からお金をもらう場合でも、最初には要らないといった方が大体集まります。

最初から、これだけ掃除をするのでいくらかお金をくださいというと、行政にもこれは金を取りに来た団体だと思われる。

最初はお金なんか要りませんといって、1年か2年かやっていると、市民からあそこを応援しなくてはいけないのではないかという声が出てきます。

ですから、1年か2年で物を言うのではなく、10年ぐらいのスパンで見えていく必要があると思います。地域を良くしていこうという気持ちで活動をしていきますと、必ずみんなが応援してくれます。

そして、こういうまちづくり運動というのは、住民参加ではなく行政参加でなくてはいけないと、私は思っています。まずは、我々市民がやっていく、それから行政も一緒になってやっていくという方がいいと思います。

自分たちでまちづくりをやっていきますと、私の経験からして必ず応援してくれたように思います。

今でも、私が頼みにいくことについては、だめだと言われたらこちらが一度引き下がらなければいけないと思うぐらい聞いてくれます。

今、予算は非常に厳しいですけども、厳しい中でもよく認めてくれているのではないかと思います。

陣内 そこまでこられるのは大変なご努力があったと思います。

その点、今日、山田さんは柳川市の行政の側から来られている訳ですが、これまで本当に市

民と一緒にまちづくりをしてきているのではないかとお察しします。

今まで掘割が復活してきたプロセスなどを伺っていると、市民と行政の両方が、実に上手くコラボレーションしてきたのではないかと思います。今や柳川では、掘割が大切だということは皆さんの認識の中にあるでしょうし、やっぱり残してよかったという意見もあるでしょうし、そういった点で両者の関係は上手くいって、問題は今もないのでしょうか。

まちの一体感をつくり出す

山田 柳川は平成17年に1市2町が市町村合併をしまして、今は新市としての一体感をいかにしてつくっていくかというのが、我々の大きなテーマです。

この水の問題にしても、3つの市と町では、旧柳川のほかに、上流域にある町と、下流域にある干拓地域の町が合併しましたので、地域ごとに水の条件が違います。

旧柳川の上流域にある町については、結構水が豊富にあるということもあり、そういった市民の人たちの意識の面で、いかに一体感をつくっていくのかというのが大きな課題になっています。

陣内 柳川というのは、掘割が巡っていて全国的にも有名ですから、観光客もたくさん来ていると思いますが、上流のまちもそういうまちづくりを一緒に展開していける可能性というのは大いにあるのでしょうか。

山田 正直な話、現状として、掘割は旧柳川市のものじゃないかという意識があると思います。

掘割が旧柳川市の地域の中にありますので、やはりそういった意識の中で、旧柳川市のものじゃないかという方もやはりいらっしゃるかと思いますので、そういったところを一体的に、

市民みんなのものですよということを分かってもらって、一緒に考えてもらいながら、一体の市になっていくというのが大きな課題ですね。

陣内 柳川が市町村合併されたのは、旧柳川市が中心となって他のまちを吸収したという形でしょうか。市の名前にも柳川が残った訳ですから、その点では恵まれていますよね。

逆に、水に恵まれた小さいまちが他の大きなところに吸収されてしまうような合併も全国でよく起こっていますよね。そうすると、まちの名前も変わってしまって、なかなか苦労されているということもよく伺います。

柳川の場合は、そういう水のまちというアイデンティティはキープしながら、まちが広がったという感じでしょうか。

山田 旧柳川市が人口4万2千人ぐらいで、残り2つの町が人口1万5千人ぐらいでしたけれども、合併の方式は3者対等合併という形で進めました。

新市の名前については、市民の皆さんからアンケートをとった結果、柳川市が一番多かったということで、それを参考に、合併協議会の中で決定したということです。

陣内 ありがとうございます。広島はまちとしてはかなり大きいですよ。

人口が100万人を超えてくると、広島が水のまちだということはかなりアピールしていると思いますが、それでも市民の皆さんがそのイメージを共有して、NPOの活動にすぐに共鳴してくれるという状況にはなかなか持っていくと思います。

大阪が全部の船を集めて水上パレードをやったり、徳島の中村さんの活動が本当にみんなの後押しを得られていたりということとは、まだまだ状況が違って、苦戦も多いと思いますが、その辺のご苦労はどうでしょうか。

よそ者が発見するまちな魅力

氏原 本当にうらやましい限りですが、広島は私もよそ者で、10年前に夫の転勤で広島に越してきました。

いわゆる市民活動、自ら活動されようという方は、多くの方が平和活動をされていまして、割と川に関わるボランティア団体や活動している方というのは、少ないと思います。それだけ「平和」という絶対的なコンセプトを持っているまちですね。

私たちは水辺にこだわっていきまして、広島市にも水の都担当の方がいらっしゃるって、水の都ひろしまづくりを色々やっていますが、確かに情報発信力はあまりないと思っています。

けれども、先ほどDNAというお話がありましたが、広島の人たちには川に元々親しんでいたというDNAがあると思います。

私みたいなよそ者は広島川を見て、まず柵がないことに驚きました。そして川に下りる階段が至るところにあって、こんなことが許されるのかとビックリしてしまいました。

ただ、私たちからすると川に下りる階段という発想ですが、広島の方と話をすると、川から上がる階段とおっしゃいます。というのも、小さい頃に川で遊んだ記憶が必ずある人たちだからです。

私は、雁木というのは、まちと川を結びつける拠点になると思っていますが、あえてよその人間が雁木、雁木と言わない限りは、地元の人にも気づかないことが多いと思いますけれども、こうやって雁木、雁木と言いつついる内に、そのことを否定する人はいないということに気づいて、それは大きな応援になっています。

陣内 先ほど、雁木組のメンバーがどんな風に集まって活動されているかというお話がありましたが、色々なことをやるとお金がかかると言います。NPOでやってらっしゃるということ

で、企業や自治体からの資金面での応援体制というのはどうでしょうか。

氏原 基本的に、運航事業そのものには補助金や調整金を充てないという方針でしていますので、大変苦勞しています。

保険代とか係船代を払うだけで本当に大変でして、そこは必ず乗船料をいただくということで継続しようとしています。

ただ、新たに投資をしなければいけない、例えば船を新しくしたいというときは、一口3千円で数百名集めて、仲間をつくっていくようにしています。これもお金がないときの企画に変えるというプロジェクトの一つです。

陣内 社会実験のお話から始まって、みなさん上手くいっている例、ご苦勞されている例、上手くいき過ぎている例などもあったかもしれませんが、谷本さん、みなさんからお話を伺ってコメントをいただけますでしょうか。

まずは自分たちの力で始める

谷本 私は行政側の人間ですけれども、こちらにもNPOと一緒にやってみたいと思っている人がたくさんいます。ただ、一緒になってやりたいけれども、たくさんNPOがあって、どこと一緒にやればいいのか峻別がつかないところがあるのだと思います。

中村さんのところみたいに20年もやってきている間違いのない団体がある場合は良いですが、まだ出来たばかりの同じような団体がいくつかあって、こっちには助成金を出せるけど、こっちは出せないという場合に、どっちに出しているのか分からない。分からないときは両方に出さないというのが、役所流の決め方じゃないかと思いますが、そういったところをどう破っていくかというのはなかなか難しいですね。

中村さんのお話もその通りだと思います。ま

ずはそういったものをあてにしないで、世の中に貢献しているという大義を振りかざす前に、自分たちがやりたいように楽しんでやっているのだったら、お金も自分たちで集めるところから始めるということです。それを世の中が地域貢献の一環と認めてくれたときに、行政の側から応援させてくださいという声がかかると思います。

そこまで行き着ければ、あとはかなり順調にいけると思います。今、上手に動かしていただいているグループというのは、みんなそこまで辿り着いていると思います。

陣内 今おっしゃったとおり、色々な組織が頑張っていますけれども、なかなか横の連携というのは、東京の場合でも本当に難しいです。

本当にたくさんのグループがありますが、協力するどころか、お互いに足を引っ張り合ったり、けなし合ったりという状況もあります。

広島や大阪というのは、本当に色々なイニシアチブがあると思います。

特に大阪の場合は、色々な性格のグループがみんなで盛り上がり、一つの大きなプロジェクトを成し遂げてしまう。しかも、企画から実現までが早い。それはどういうことなのかと、いつも不思議で仕方がありません。さっきのご説明でも何となく分かりますが。

大阪の大人文化

伴 大阪というのは大きく見えますが、言ってみれば大きな村みたいなものです。知り合いばかりがやっていますので、「あいつがあんなんするんやったら、わしはやめとこ。わしはこんなんしょう。」という風に、人と同じことはしたがりません。

それから、大阪の場合は自分たちでお金を出していくという風習があります。大阪城もそうで、昭和6年11月7日に全額市民の寄附で建て

ました。今の価値で150億が、半年で集まりました。

つい最近も、落語の繁昌亭を市民の寄附でつくろうということで、1年間に2億4千万円が集まりました。

そういった、楽しいことをするのなら自分でお金を出そうという、ある意味での大人文化が大阪にはあります。そして、親が寄附している姿を子どもが見て、早く自分も勉強して、大人になって寄附をしたいと思うようになります。

あくまでも商都大阪で、商売人のまちですから、自分がやりたいことは自分ですという習慣があります。

こんなことを言うと少し失礼かもしれませんが、例えば100万円の助成金をもらおうと、1,000万円の知恵がなくなるからもらうのを止めておこうとか、そういったことで大阪はやっていきます。

そして大阪は、水の都大阪、食いだおれのまち大阪、商都大阪という3本柱が常にリンクしています。水は天神祭でみんな見ますし、道頓堀川もある訳ですが、水辺だけでなく、その3つが複合的に作用して、NPOもそれぞれの持ち場で、お互いに立ち行くようにやっていこうとしています。

陣内 ありがとうございます。柳川は大阪と比べれば小さいまちですが、色々な市民のグループがあるのでしょうか。

そして、その人たちは上手くつながってやっていますか。固有のNPOとだけ行政が仲良くなってしまおうと、なかなかやりにくいところもあると思いますが、その辺はどのように付き合ってもらっていますか。

柳川市における市民活動

山田 柳川市にはNPOが7つぐらいで、実際に活動してもらっているのは2つか3つぐらいと

というのが現状です。

実際にこういった活動をするときには、観光協会や商工会議所など、業種ごとの組織と上手く調整しながらやっているのが現状です。

陣内 ありがとうございます。先ほど氏原さんのプレゼンテーションの中にも、色々な楽しいイベントが出てきましたけれども、あれは雁木組ではなく、別のグループがやっているのですか。みなさんとリンクして。

まちによって合意形成の仕方が違う

氏原 一緒にやることもありますし、私たちが自分から仕掛けることもあります。

ただ、最近は運航だけでも精一杯でして、至るところで色々なイベントをしていますので、現在は、それをネットワークするというやり方をしています。

志の高い市民の方たちがそういう活動をしていますので、そういう人たちとはネットワークする役割としてとても上手くいきますが、やはり同業他社につきましては、なかなか難しいものがあります。

私たちが運航を始めてから、本当に多くの自治体の方がヒアリングに来られますが、いつも聞かれることが2つあります。まずは、雁木を使うに当たってどういう許可を取っているのかということです。「自由使用です。」と言うと、必ず皆さんメモをとっています。3年ほど経ったらその質問はなくなりまして、世の中みんな自由使用になったのかなと思ってしまいます。

それから、他の同業他社といいましたが、広島には少し違った形の遊覧船事業者がいらっしゃるのですが、そういうところとどのように連携しているのか、例えば安全のルールはどうしているのか、というような質問を受けます。

これは今の私の考えですが、まちによって合意形成の仕方が違うのではないかなと思っていま

して、私が拝見している中では、大阪は色々な水上交通の業者さんがいますが、ちょっと力があるというか、昔からある大きい人たちの心が広いように思います。そしてみんなをまとめる人がいて、まとまっているのかなと個人的には思っています。

広島の場合は、私たちにもまだまだそんな力はありませんが、だからといって行政がこれを整理しようとしても決して上手くいかないと思います。公平性、公益性というものが、かえって壁になっているのではないかと見受けることもあります。

あとは、東京がそういう意味ではとても苦勞しているという話も聞きますが、これも東京ならではの答えを見つけ出していかなければいけないのではないかと思います。

陣内 東京は本当に苦勞が多くて、大変です。先ほどの伴さんのお話の中で、水上タクシーの鍵の管理が本当にややこしくて、3日も4日も手続きにかかってしまうばかばかしい状況だったということですが、それを克服した訳ですよ。

それは元々、防災船着場としてできているところに柵があって、その鍵が管理されていたけれども、今は鍵の管理をNPOが自らなさるようになったということで、本当に驚くことです。

一方、広島の雁木タクシーの場合は、雁木というのは柵も何もなくて少し危ないかもしれないけれど、とにかくそこを掃除して使ってしまうということなんです。

だけど、それを一つのNPOだけが独占して使っているというイメージが出てしまうと、まずいということもあるのではないですか。雁木はだれが使ってもいいということですよ。

ルールだけではなくマナーの徹底を

氏原 雁木を使うのには相当数のボランティアが必要なので、今のところ私たちの後に出てく

る人はいませんが、やはり既存の国が造った栈橋などはまだまだ自由には使えない状況にありまして、そういったことをまだ行政が整理できていません。

一つの栈橋を色々な人たちが使うには、ルールとともにマナーが必要だと思います。行政はルールを作ることはできても、マナーまで徹底することは難しいのではないかと思います。そこを上手くやってらっしゃるのが大阪なのかなと思います。

陣内 その辺は谷本さん、どうでしょうか。一つの要のポイントになると思います。

みんなが色々なことを考えて、マナーも自分たちで作りながら、場合によってはNPOという形で社会実験から始めることも多いかもしれませんが、段々と合意や約束事ができ、使われる方向にいつているような気もしますが、東京はまだまだ大変です。

その辺の問題はデリケートですけれども、何かご意見はありませんか。

社会実験が規制を変える

谷本 ちょっと堅苦しいことを言うと、元々、川というのは危険もはらんでいる場所だということ、これは河川管理に限らず日本の法律はみんなそうですけれども、人間は放っておくと悪いことをするものだという前提で法律が出来ているということがあります。

だから、悪いことをしてはいけませんとか、悪いことをしたらこういう罰則がありますという法律はあっても、良いことをしたら褒めるという法律はない訳です。99人がルールを守っても、1人がルール違反したら、やっぱり厳しいルールを変えることができないという法律の仕組みになっています。それを、厳格に運用している限り、この壁は越せないと思います。

そこで、さっき申しあげた社会実験として試

しにやってみるとというのが一番良いのではないかと思います。

あるいは、大規模でなければこっそりやってみるという手もあります。

先生のご講演でも紹介のあった、田中栄治さんのeボートですけれども、あれは平成7年に多摩川で浮かべたのが川では最初ですが、あのときは誰にも相談せずに川に浮かべて、浮かべた次の日に、当時私そのの所長でしたので、あなたのところの川で勝手にやりましたという報告に田中さんが来られました。

それは、別にルール違反でも何でもなくて、自由使用の範囲だから問題はありませんでしたけれども、役所に聞くと駄目といわれるかもしれないから、実績をつくってからこそっと報告に来たということでした。

やって良いことと悪いことがあります、そういう知恵をみんなを出していくしかないのではないのでしょうか。

陣内 最初からやってもいいですかと来られたらお答えしにくいですがもんね。それは阿吽の呼吸で上手くいったということですね。

ご質問の中に「元気のない地方都市において人が集まり、弱り果てた商店街を元気にできるような水辺づくり、水辺使いがあればご教示ください。」という質問があります。

私への質問ということですが、例えば徳島も、水辺の魅力づくりが、やがて商店街の方にまで広がっていくようなことを考えたいというお話がありましたよね。

水辺の再生、水辺の親しみある空間づくりというのは、当然、広がりを持って商店街やまち全体の元気、個性につながると思います。

この間、東京で水の空間を生かしたアクアツアーリズムというテーマでシンポジウムを行いました。これもなかなかおもしろいテーマで、考えてみれば、日本の観光の中で水と絡んだものというのは江戸時代からたくさんある訳です。

もちろん大阪もそうでしたし、江戸もそうでした。

江戸や大阪の楽しみ、ツーリズムというのは、本当に水とつながっていました。行楽へ遊びに行くのも船で行く、あるいは旅館や料亭が水辺にある、京都はまさにそうですが、それを現代的にアクアツーリズムという形でもう一度考え直したいというシンポジウムがありました。

それから、まちづくりの中でも、川沿いの景観をよくしていこうという考え方や意識、活動がそっちへ広がっているということもあります。広島なんかは、まさに水辺の景観が先にあったような気がします。

広島の水の景観は本当に先進的で、気持ちの良い水と緑の空間が整備されています。そこに、段々とNPOや市民のアクティビティがついてきたというのが広島だという気がします。

そうやって水から始まって、アクティビティを広げていく、あるいはまちづくりや商店街振興につなげていくことは可能だと思います。

また、アクアツーリズムということになると、みんなのイメージを膨らませなければなりません。歴史的な建物や橋、史跡、物語、神話的なものなど、大阪でもそういうことを掘り起こしながら色々な物語をつくっているような気がします。

そういう広い意味での文化、観光を絡めながら、水辺の魅力づくりをやっていくと、必然的にその方向に行くのではないかと思います。

その辺のテーマについて、中村さんどうでしょうか。商店街づくりとのつながりといったことも含めまして。

商店街を川から活性化する

中村 私がいる商店街も昔は良かったですけども、それが段々と悪くなってきていて、今では水辺のほうがずっと良くなっています。

これからは川を良くして行って、そこに人が

集まってきて、その人たちが商店街に行くというような反対の流れになるのではないかと思います。

そうなってくると、やはり環境を良くしていくということが全体のまちづくりにつながっていくと思います。

徳島の場合、非常に川が多いし、それを活かしていくと非常にいいまちづくりができます。遊覧船にしても、最初は100人だったのが今では50,000人も乗るようになりました。

相当の人が川に来るようになって、船に乗るのも長いときであれば2時間も待って船に乗ります。

そのとき商店街に行きますと、人がだれもいないということがありますが、これからは川がよくなってきて、それから周辺がよくなってきて、それから商店街がよくなっていく、そういう逆の流れになっていくのではないかと思います。

ですから、障害者もお年寄りも子どもも、誰でもが楽しめる川、そんな川ができていくと、今の川が観光資源にもなってきて、大きなものになると思います。

川づくりですから、あんまり短く考えるのではなく、私が掃除でも「石の上に3年。川の上に10年。」と言いますが、じっくりと構えることが大切です。

小さなことでも継続していきますと、ものすごく変わっていきますので、近いうちに商店街も川から活性化できるのではないかと思いますし、そういうまちになっていった方が、これからの商店街にとってもいいのではと思っています。

陣内 よく使われる言葉で「回遊性」という言葉がありますよね。川があり、その後ろにまちが広がっている。そこへみんなが自然に流れて行って、場合によってはそこに路地があったり迷宮があったり素敵なお店街があったりする。

川というのは夜もいいですよ。徳島の夜の川はを知りませんが、一般論として大阪とか。

中村 夜の川も良いですよ。

陣内 夜の川がいいということは、夜の散歩や歩いて飲みに行ったり食事に行ったりするのも楽しいですよ。

中村 今は台船の上でお酒を飲んでいるぐらいですが、近いうちに、周辺の人が夏になると夕飯を川辺で食べたりするようなまちにしたいと思います。

夕飯は新町川で食べようとか、助任川のところで食べようとか、そういうように市民が川辺に寄ってくるようなまちにできるのではないかと思います。

陣内 それいいですね。本来、日本のまちはみんなそうだった訳ですよ。大阪も江戸も京都も、川沿いで食事をしたり飲んだり楽しんだり時間を優雅に過ごす場所が一杯あったのが、なくなってしまった。

だけど、みんな離れていたのがまた戻ってくるまちづくりということで、徳島はその先駆けになってもらえればと思います。

中村 潮風に吹かれるともものすごく元気になりますから。

陣内 そうですね。それでは大阪はどうでしょうか。東京ばかりに開発が集中して大阪は元気がないという意見をよく聞きまして、そう刷り込まれていました。

実は全然そうではないということで、水を媒介してのまちづくりや文化、観光振興ということについては、大阪が今、すごく元気な訳です。

川と手を組んだ天神橋筋商店街

伴 川のすぐ近くに天神橋筋商店街という、日本で一番長いと言われている 2,600mの長さの商店街があります。日本で一番長いというのも詳しく調べてはいませんが、よそから文句が出ていけませんので恐らく日本一だろうと思います。

回遊性ということであると、かつての天神橋筋商店街は疲弊していました。空き店舗問題というテーマで経産省から何かやってくれと言われてまして、色々なシンポジウムをそこでやりました。

そのときに、商店街の端から川のある天神橋まで歩いてくると 1 万歩になるから、歩き通したら万歩状というものをあげましょうということで、商店街と川が組みました。

そして、すぐ近くに天神さんの神社がありますので、そこで巫女さんから確かに完歩しましたという証明書ももらって、そして船に乗りに来るというシステムをつくりました。それが回遊性ですね。

日本一長い商店街を歩いて船に乗って、船からは高速道路が上を通っている東横堀川を、日本一長い川のアーケードがあるということで、日本でも珍しいと紹介しながら道頓堀まで行くとか、色々知恵を使って回遊させる仕組みを作り上げた結果、かつての天神橋筋商店街は空き店舗が多くありましたが、このごろは満杯になっています。

だから単品ではなくて、商都大阪とか水の都とか落語とか何もかも、色々な仕掛けづくりを複合的にすることです。

例えば、天神さんの横に落語家が繁昌亭というのをつくったとお話しましたが、下手な落語家ばかり呼んできて受験生に聞かせるという企画しました。下手な落語家のオチがない落語を聞いたら試験に落ちないという、そんな落語をする訳です。

そうやって、どんどん複合的に楽しませてい

くことをすると、下手でも落語家はお金をもらえるという。受験生は笑ったら落ちるので、一切笑いません。そんなことを複合的にやっていくというのが大阪ですね。

陣内 すご過ぎますね。ぞくぞくとアイデアが出てきて本当にすごいです。本当に本質をついたお話で、なるほどなと思いました。

柳川は昔から観光のまちで有名ですが、掘割が大切にされて復活して、色々と環境整備も行われて、水辺に広場ができたりしていますよね。

そういう中で、何か質的に変わっていったことってありますか。観光の仕方やもてなし方が変わるとか。

アクアツーリズムということを私たちが言っていますが、従来の柳川に皆さんが期待していることとして、船で回って白秋の足跡をたどったり、ミュージアムに行ったりということはイメージできると思いますが、もう少しまちづくりに反映するとか、いいお店が水辺に出てきているとか、違う展開はありますか。みんなが水辺に親しむからこそできるような。

そこに民間とかNPOが対応するといったことも含めて。さっきイベントをずいぶん見せていただきましたが、まちづくりとかまちの商業振興とか、普段の生活空間が良くなるとか、そういった方向での傾向はどうでしょうか。

柳川市の新たな水辺づくり

山田 今は、一昔前みたいに団体のお客様よりも個人のお客様が増えているのが実情です。

来月から1ヶ月間の社会実験で、川下りのルート上に自由に乗り降りできるスポットをついたり、そこを拠点に、武家屋敷とか寺社仏閣とか昔からあったものを掘り起こして、まち歩きつなげていこうという実験をしたりしているところなんです。

その中で指摘を受けたのが、柳川市にも柵が

多くなったという指摘を受けました。

数年前、高畑勲監督に来ていただきまして、あの頃と比べて柵が増えて、水との距離感が出てしまったということをおっしゃって、そういったことは我々もこれから水に近づけていく、水と親しむ取組をする上で、検討していくべき課題かなと考えています。

陣内 氏原さんの話の中に、安全をみんなで考える、情報を集めるという話がありましたが、みんなが場所ごとの状況を認識して、できるだけ柵がなくて近づけるような配慮も必要じゃないかと思いますが、その辺はどうですか。

暮らしの中で川を見つめる

氏原 広島の場合は、本当に川という素材が良いと思います。これまで国交省も、とても素晴らしい整備をされてきているので、基本がこれをどう活かしていくかという考えです。

雁木タクシーも、良い雁木を使いながら残していくということをテーマにしていますが、私たちがやろうとしていることは、もっと暮らしの中で雁木や川を見つめてもらおうという取組が根本にあります。

街中に400箇所も雁木がありますので、もっと子どもたちが雁木を使って遊んでもらえればいいし、川に下りていってもらってもいいと思います。

そのために大人が川に出て、雁木を見守っているようになればいいなと思います。

もっと言えば、雁木タクシーにとっては、そうした町内会ごとにマイ雁木みたいなのが出てきて、掃除なんかをしてくれると、そして陸上スタッフなんかしてくれるとありがたいなと思っています。

そういう風に、市民を巻き込んでいくことによって、安全管理の考え方も変えていければと思います。

陣内 そうですね。環境教育といえますか、子どもの教育として、水辺の環境に親しむ、水の中に入ってしまぐらいのことをやることによって、柵の問題も新しい展望が開けるかもしれませんね。

その辺は徳島では、どんな感じですか。子供たちもみんな水の中に入って、掃除や水に親しむといったことをしているのでしょうか。

子どもが川で遊ぶようになった

中村 最近子どもがたくさんきます。掃除にも小学生がたくさん来ますが、新町川で泳ぐ子もいます。割と汚いですがけれども、子どもが泳ぎ始めたら、私もその子が上に上がるまで帰れません。もう上がれと言っても、なかなか水から出てきません。

かつてはそんな子もいませんでしたが、今は新町川でも町内の子どもが川へ遊びに来るようになりました。

陣内 会場からのご質問がもう一つありまして、伴さんへのご質問ということですが、他の皆さんにも広がることと思います。

「大阪には大学がたくさんありますが、ご紹介いただいた活動の中で大学と協働で進められたことがあれば教えてください。また、研究室に望むことがあれば教えてください。」ということです。

最近、あちこちの地域活性化の方法を見ると、外部から人が入ってきて、あるいは招いて、今までとは少し違う組み合わせで色々なアイデアを出して、事が非常におもしろく動いているということもあると思います。

大学が関与することもあると思うし、あるいはアーティストの場合もあると思います。

一番分かりやすいのが越後妻有地域の例ですが、新潟の限界集落と言われている過疎の農村地帯に、北川フラムさんという芸術のプロデュ

ーサーが関わって、トリエンナーレという芸術祭をしました。

世界中の有名なアーティストとコラボレーションして、そこで色々な作品を作ってもらって。そして地元の人が作品を作るのを手伝って、ボランティアの人がたくさん東京から行くというような例もあります。

大阪でもアートが入って活性化しているというお話を伺っておりますし、先ほどの広島の場合でも、すごく格好いいアーティストックなイベントもやっていますよね。

各地でそういう動きがあって、もしかしたら徳島や柳川でもそういうものがあるかもしれませんが、そうやって地元の人たちだけではなく、あるいは地元の人でも、従来は水辺の環境づくりに関わってこなかったアーティストやプロデューサー、映像作家などとコラボレーションするような、今までと少し違う水辺の楽しみ方、活性化の仕方、演出の仕方、若者の関わりというものがあっていいと思います。

クリエイティブな人たちがポスターや映像を格好よくつくるといってご紹介もありましたが、そういうクリエイティブなあり方について、それぞれ簡単にお話いただければと思います。

年寄り、知恵者、地の者がまちをつくる

伴 大阪ではつい 1 週間ほど前に、「水都大阪 2009」という水辺のイベントが終わりました。

外側からアーティストが来て色々なことをするのも刺激になりますけれども、最近、大阪がなぜ成功しているのかと考えたときに、昔はよく「若者、ばか者、よそ者」と言われていたけれども、大阪では今、「年寄り、知恵者、地の者」という 3 つの柱で活性化し始めたと思います。

色々な市民も一緒にやろうということで、地元の人、例えば神主さんや宮司さん、お寺の住職、町会長に動いてもらい、なおかつその土地

の知恵者であるお年寄りを引っ張り出して、色々な情報を聞くということです。

先ほどの七夕祭りもそうで、今までは星に願いをということで空のきれいな星に向かって願いをかけていましたが、実際にその星に行ったら摂氏 400 度の星だった、亜硫酸ガスの星で人間は住んでいられない星だったということで、銀河系で一番きれいだったのは、実は自分たちの足元の星でした。

それで、地球を愛しましょうという環境のイベントとして七夕祭りをしています。

自分たちのふるさとの情報、情報というのは情けに報いると書きますが、これは昔の人でいうと訪ねてきた人への土産話です。

土産というと、すぐに物産で土産をつくるというのではなく、土産話を大阪でつくって、それは荷物にならないので帰って伝えてもらって、またそこに行きたくなくなるという、そういうまちづくりを大阪では今、やっています。

陣内 本当に目から鱗が落ちる感じですね。見事に私の質問の浅はかさが露呈してしまいましたが、本当にそうだと思います。

日本はどこかのまちで成功すると、みんながそれに流れる傾向があって、これからはアートだということで今、日本のまちづくりではクリエイティブシティ論が活発になっておりまして、アートとまちを結びつけようという動きが多い訳です。

もちろんそれも、上手くやれば長続きしますが、もっと本質的には、先ほどのお話のように地元のお年寄りの知恵、地元の情報といったものがもっともっと発揮されるようにということですよね。

川づくり、水を生かしたまちづくりといったことが大きなテーマとして、皆さんからお話が出ていますが、ここまで聞いて谷本さん、いかがでしょうか。

川はまちな鏡

谷本 川が流れているまちがそれぞれ違うように、こういう川が一番素晴らしいという理想形があるわけではないですね。

ですから、結局は地域の人その川をどう思っているのか、どのようにしていくのかということだと思います。それを最近、私は「川は鏡です。」という言い方をしています。

「子は鏡」という言葉があって、子どもの振る舞いを見ると、親御さんや家庭がどういう環境なのか、あるいはどういう育て方をされているのかが分かるという意味ですが、同じように川がどんな状態で流れているのか、川沿いの状況がどうなっているのかということが、そのまちの人々の暮らしぶりや川に対する想いを映している鏡だと思います。

ですから、知らないところに行くと、川に風情が感じられるとすれば、やはりその地域の人やまちもそうなっているだろうし、川に対する想いもそうなのだろうと思います。

何も答えになっていませんが、要は千差万別色々な答えがあって良いけれども、それぞれのまちにおいて「これがうちのまちの川です。」と人様に自慢して紹介できる川になってほしいと思います。

陣内 それでは最後に、今日、4つのまちの事例をご報告いただきました方々それぞれに、今後の抱負と伺いますか、こんなことをやってみたい、こんなことを考えている、あるいは会場にいらっしゃる方へのメッセージを簡単におっしゃっていただきたいと思います。

今後の抱負

氏原 私自身、今日、とても勇気づけられたのは、中村さんの発言が前向きなことしかなかったことです。

私も活動を始めて5年目で、まだまだ大変なこともあります。中村さんも最初の1年目は年間100人しか乗らなかったということを聞いて、少しほっとしたりもしています。

一番大切なことは、こうやって自分たちがやっていることに自信を持つことではないかなと思いました。

そして、少しの勘違い、私なんかは大きく勘違いをしていますが、まちは自分たちで変えていくという気概をもってやっていく、このことはずっと継続していきたいなと感じています。

陣内 ありがとうございます。それでは、伴さんをお願いします。

伴 私たちも今年が大阪の水都元年ということで、怒られるかもしれませんが、大阪の天神橋筋商店街に水溜りをつくろうかと考えています。

うちの子供たちが幼稚園のとき、雨があがって晴れていても、わざわざ親の手を離してまで水溜りに行っていつまでもパチャパチャしているのを見て、人類が水を好きな本来の姿はこれじゃないのかと思っています。

本能的に水が好きだということで、天神橋筋商店街に穴を掘って水を貯めたりして、子どもが歩いたときにパチャパチャできるような原点に帰った水辺の遊びを考えてみたいと思います。

陣内 ありがとうございます。それでは山田さん、お願いします。

山田 私たちはやはり、上流から流れてきた水を掘割のところで汚さずに海に帰していくという取組を継続していきたいと思っています。

将来の子どもたちにそれをきれいな状態で残していく取組を色々やっていきたいと思っています。

陣内 ありがとうございます。それでは中村さ

ん、お願いします。

中村 まちづくりとか川づくりというのは、やはり相手を良くするという気持ちを持たなくてはいけないと思います。

新町川を良くしようと思えば吉野川を良くするし、吉野川を良くしようと思えば源流から良くしていくという。

さらに、今、筑後川と吉野川の兄弟縁組を結ぼうとしていますが、徳島の川を良くしようと思えば、筑後川も良くしていくというように、相手も良くしていく。

連携というのは、自分から出かけていくことだと思います。そして、自分たちのまちは自分たちでつくっていく、それをみんなが応援してくれるのではないかと考えています。

それから、身障者にも健常者にも誰にでも使いやすいような川づくり、それがいいまちづくりになってくると思います。

みんなが楽しめるような川になっていきますと、みんなが川に集まってくると思います。

今、徳島の場合は、川、川、川となっているように思います。これから徳島のまちも、大きく変わるのではないかと考えています。

陣内 ありがとうございます。もう1回谷本さんに、全体をお聞きになってご感想をいただければと思います。



人のチームワークが壁を越える

谷本 感想ばかりしゃべっていますが、今日ご発表していただいた4人の方は、非常に上手くいっている、苦勞をしながらも、なんとか軌道に乗せて順調にしているという事例ですよ。

こんなことを言うと怒られるかもしれませんが、これからきっと、何か次の壁があるだろうと思います。その壁に出会ったときに乗り越えていく原動力というのは、結局、人のチームワークしかないと思います。

今日、それぞれ持ってきていただいた情報は、私には新鮮なものがたくさんありましたけれども、皆さんにとってもそうではなかったかと思えます。

直接ではないにしても、自分のまちの川にアレンジして使うということが、次の壁の突破の原動力になってくれると、今日のこういった集まりに大変意義があったと思います。

陣内 ありがとうございます。今日、ご発表いただいた4つのまちというのは、日本の中でも際立って意欲的に色々なことをやられていて、成果をあげている地域です。

特に、都市の中で、街の中で水辺を活かしている良い事例というのは、日本にまだまだたくさんはありません。

自然河川というのは結構ありますが、街の中の水辺をいきいきと再生して、活用されて、文化を発信しているというところまでもっていている事例はそう多くはない中で、どのまちにも可能性があるということを感じていただけたかと思えます。

今日も話題になりましたが、今まで河川という管理、規制が厳しかったですし、市民の側にもなかなかそれを乗り越えて親しもうという機運が少なかった訳で、本当にこれからだと思います。

海外のまちと比べても、日本には本当に住民

のおもしろい活動がたくさんあります。

ヨーロッパなんかでは、自治体が都市計画の中でしっかりと水辺空間をつくっていくものですが、日本の場合は、住民の自発的な、本当に何かやってみたいというエネルギーが人々の中に一杯あって、よきリーダーがいて、よき場が作られています。

本当にユニークで、エネルギーで、クリエイティブなイニシアチブがどんどんと膨らんで展開してくと、それが日本のまちづくりの大きなパワーになるということです。

それが出てくると、行政も当然、それを応援してくれるということになります。中村さんがおっしゃっている行政参加という言葉は重要で、特にこの水辺づくり、ここから始めるまちづくり、地域おこしにとって、そういうメカニズムが大変効果的だし、実績を挙げているのではないかと思います。

今日は色々な話題が提供されたので、それを掘り下げることができれば良かったのですが、例えば川というのはまさに上流から下流までつながっていますので、本当に連携が重要で、だからこそ川の駅をつくって結んでいこうという流れがあります。

かつては、人も情報も物もそこでつながっていたので、地域が一つの利害をともにする共同体を持っていた訳です。それがみんなバラバラになってしまって、つまらなくなってしまう。だから広域、源流の魅力、源流の森林を大切に、海まできれいな水を戻すということも大切です。

観光を考えたときも、本来は船で周遊するという文化がどこの地域にもあって、海の周りだけでなく、中の河川までのぼって行ってました。そういったことまで、観光の枠を広げていくということも、次のステップでは大いにあるだろうと思います。

いずれにしても、地域が持っている人や知識、経験、それをさつき伴さんは「お年寄り、知恵

者、地の者」と表現しましたがけれども、それらを複合的に組みあわせていくまちづくりが大切だということですね。

そして何よりも、楽しむことです。日本人は本来、その遊び心を持っている訳ですから、それをもっと大きく育てて水を中心に展開すれば、舞台は揃っているのではないかと思います。

今日はこういうことを議論するには最高の場所である、徳島の新町川の近くでこういう会を持つことができました。

皆さんに積極的に議論に参加していただき、これから色々と考えていく上での刺激になったことと思います。

それではそろそろ閉じたいと思います。どうもありがとうございました。